

近畿の経塚

村木 二郎

【要約】 極楽往生を期して各地に造られた経塚は、一一―一三世紀の寺社勢力の動向を窺うには恰好の資料である。二大経塚集中地の一方である近畿の経塚を検討するにあたって、まず蓋部の形態と筒身部の口径に基づき、銅製経筒の型式分類を行う。次に外容器の種類を分類し、経筒と外容器の分布域から、これまでひとまとめに言われて来た近畿の経塚を、二段盛蓋式、二段笠蓋式経筒など大振りの経筒と東海系の外容器を特徴とする「京の経塚」、一段笠蓋式、二段笠蓋式経筒を特徴とする「播州の経塚」、一段盛蓋式経筒を特徴とする「三丹の経塚」に区分する。また埋納法が経塚造営を主導する勸進僧の作法を反映すると考え、経筒の型式と経塚の埋納法との関係から、鋳物師と勸進僧との関係を見る。もう一方の経塚集中地である九州の経塚が鋳物師と勸進僧との関係が非常に密であったのに対し、近畿の経塚ではその関係は見られない。そこで両地域の経塚の造営姿勢が異なっていることを指摘し、これまで経塚の二大メッカと言われながらも説明されていなかった、近畿と九州の経塚の異なった展開の仕方に対する解答とする。

史林 八一巻二号 一九九八年三月

はじめに

古代から中世へと日本社会が変転して行く混沌の時代。人々の心には末法思想が根付いていた。欣求浄土の声は下々にまで広がっており、来世を期して、様々な作善業が実践された。「経は法華経、さらなり」と『枕の草子』にも謳われる法華経は、当時最も重視された經典であった。その中で法華経を写経することが大きな功德であることは度々述べられている。それを埋納し、来世仏である弥勒如来が下生する五十六億七千万年後まで伝えることは、仏滅を危惧しての宗教的

行為である以上に、浄土への道を約束する作善業として、人々の間に広く流行した。これが各地に造られた経塚である。

経塚の造られた一―一三世紀とは、顕密八宗のいわゆる旧仏教勢力が古代的体質を中世的に転換し、淘汰を重ねつつ、封建領主として姿を変え、中世における隠然たる勢力を培って行く時期である。人々の厚い願いが込められた経塚は、また彼らの試行錯誤のひとつの姿でもあった。経塚造営には様々な宗教的作法が必要である。人々に経塚造営の功德を説き、これを勧め、一切を取り仕切ったのは勧進僧である。中世史研究も今や考古学的な裏付けをなくしては語れなくなっている。限られた時代に、全国的に造られた日本独自の遺跡である経塚は、古代から中世へと転換する寺社の姿を考古学的に追究するのに恰好の素材なのである。

経塚は平安京を中心とした近畿と大宰府を中心とした九州北部地域とに二大集中をなすことは早くから言われて来た。しかしこれらと比較検討した研究はない。近畿の経塚と九州の経塚とが同様のものであるか否か、相違するとすればそれはどの点にあるのか。このような基本的な問題も解決されないうちは経塚起源論のような経塚自体の研究も進まず、ましてや経塚研究を通して中世史に貢献することなど不可能である。そこで本稿では近畿の経塚について論じ、別稿で述べた九州の経塚の特徴と比較する。方法としては、これまで近畿の経塚と漠然と言われて来た丹後・丹波・近江・伊勢・志摩以西、但馬・播磨以东の経塚を網羅的に集成し、一覽表にまとめる。更に銅製経筒の型式分類を行い、それに伴う外容器、遺構を加味して経塚の埋納法を見る。経筒の型式と埋納法との関係から近畿の経塚造営の特徴を導き出し、九州の経塚造営体制と比較し、両者の経塚の特徴を浮き彫りにしたい。

① これまで全国的に経塚を扱った研究が、近畿地方としてくくって来

た慣習的な範囲である。蔵田蔵「経塚論」七―九〔MUSEUM〕

一七四、一七六、一七七、一九六五年。奈良国立博物館「経塚遺宝」

一九七七年。同「経塚出土陶磁展 畿内に埋納されたやきもの」一九
五年。関秀夫「経塚地名総覧」一九八四年。

近畿の経塚は経筒をはじめ豊富な副納品を伴うものが多く、その華やかさは一方の経塚集中地である九州をもはるかにしのぐ。まさに平安京の貴族達によって築かれた経塚を暗示させる。実際、撰閲家の藤原道長、上東門院彰子、藤原師通、九条兼実といった貴顕を筆頭に、当時の埋経事例は文書記録に残っており、金峰山経塚からの藤原道長銘経筒の出土はその考古学的な証明を得たものとしてあまりにも有名である。また下級貴族清原信俊が埋納した経筒が鞍馬寺経塚、粉河産土神社1号経塚の二カ所から出土しているが、これは道長の埋経から百年以上経た当時の平安京貴族の間で経塚造営事業がかなり一般的になっていたことを物語る。

近畿の経塚研究史は古く、戦前にまで逆上る。この時期の研究は、正式な発掘調査を経ず、研究対象が出土遺物にのみ限定されていた。そのため金石文資料として経筒に刻まれた銘文に基づく研究がリードすることになる。また華やかな出土品に目がいくためか、比叡山^④、金峰山、熊野^⑤といった平安京貴族の篤い信仰の下の大規模な経塚群を形成したもののや、花背別所^⑥、鞍馬寺^⑦、稲荷山^⑧のような平安京周辺の経塚が主として研究対象とされ、近畿でも播磨地域や丹後地域といった地方に築かれた経塚には手が伸びなかった。そのため近畿の経塚と言えば自然と平安京貴族の手になる華やかな経塚が念頭に浮かぶようになり、多かれ少なかれ現在でもその傾向があるのは否めない。

ここで広く日本全国の経塚研究を眺めてみると、群を抜いているのが九州の経塚についてである。小田富士雄氏による積上式、中国産陶磁器、滑石製の三つの九州型経筒の提唱^⑩から、同氏の求菩提型経筒、杉山洋氏の四王寺型経筒の設定^⑪など、経筒の型式分類が着々と進んでいる。こういった基礎研究がなって漸く考古学的議論が展開できるようになるのは今更言うまでもないが、この経筒の型式分類ひとつを採っても九州以外の地域では未だなされていない。近畿の経塚研究も、そのため各個の経塚が個別に研究されているに過ぎず、銘文研究が一通り終わると行き詰まっているのが現状である。近

畿は九州と並び称される経塚のメッカである。特に金峰山、比叡山横川といった経塚の濫觴に関わるものも控えており、未解決の経塚起源論を解くためにも、近畿の経塚研究は遅れを取り戻さなければならぬ。近畿の経筒の型式分類は何よりの急務と言えよう。

こういった遅延の現状を打破するものとして、わずかに播磨地域における一連の論考がある。亀田修一氏が江ノ上1号経筒に関して報告書で類例を探したことに始まり、それを受けて森内秀造氏が更に数例を加え、同一系統の工房で製作された経筒群と考えた。この経筒は、蓋部は三段の盛り上がりをもった笠蓋で、筒身部は筒部と底部を一鑄にした銅鑄製経筒である。これは必ずしも正式に型式として設定されたものではないが、近畿の経筒を型式分類するにあたって、一経筒型式として積極的に評価すべきである。また、森内氏の研究は兵庫県の経塚に範囲が限定されてしまっている点が惜しいが、県内での銅鑄製盛蓋、銅鑄製笠蓋、鉄製、須恵質、土師質経筒の分布に北部と南部で地域差が見られることを指摘しているのは慧眼である。本稿でも氏の研究からは多くの示唆を受けており、先行研究として欠かすことはできない。

もうひとつ経塚研究史上見逃せないのが、中世須恵器研究の一環として出された吉岡康暢氏の論考である。これは広く日本全域にわたって、経塚に用いられた陶製外容器を須恵器系陶器の転用外容器を中心に集め検討したもので、非常にスケールの大きな研究である。氏は中世須恵器の編年を元に、近畿の経塚は一二世紀半ばから一三世紀初頭にかけてピークを迎えると、紀年銘経塚から判明していることの追認に終わってしまったのはやや物足りないが、これまででなされていなかった外容器からのアプローチを一気に推し進めた。しかしこれ以後この方面からの研究はない。もともと氏の研究自体、中世須恵器研究の手掛かりとして経塚を手段に用いたものであったが、現在東播系諸窯の研究の進展に加え、瓷器系陶器の常滑焼の生産地編年が提示されるなど中世陶器の研究は日進月歩している。本稿では紀年銘のない経塚には出来る限りこういった中世陶器の研究成果を援用して行きたい。

近年発掘調査に基づいた経塚資料が年々蓄積されて来ている。ここ数年でも一九九〇年但馬一乗寺経塚、一九九一年丹

波高田山経塚、一九九七年伊勢蓮台寺滝ノ口経塚、山城白川金色院経塚と挙げられる。以前では経塚遺構は資料的限界からほとんど研究対象とはされなかったが、この方面からのアプローチも現在は可能である。

経塚を構成する要素として経筒、外容器、遺構がある。本稿では、まず銅製経筒の型式分類を行う。その後外容器をも加味して、これまで近畿の経塚と漠然と言われていたまとまりを細分する。また遺構を埋納法という観点から捉え、経筒・外容器・遺構の三者の関連を見て行きたい。これは拙稿「九州の経塚造管体制」(以下前稿と略す)で採った論法と全く同様である。近畿と九州に経塚の二大集中地が存在することは古くから言われている通りである。しかし両者を比較検討した研究はない。この最も基本的な論議をなおざりにしては、経塚研究の進展はありえないことは先に述べた通りである。本稿では最後に前稿と対照させ、近畿の経塚と九州の経塚の決定的な差を述べ、古代から中世への転換期の寺社勢力の多様なあり方を窺ってみた。

- ① 「御堂関白記」寛弘四年八月一―一四日の条。「如法堂銅筒記」
 【如法経濫賜類聚記】(「大正新脩大藏经」図像一「門葉記」卷七
 九)所収。【後二条師通記】寛治二年七月一五日、二五日―八月二日
 の条。【玉葉】安元三年正月一四日の条、養和二年四月一六日の条、
 寿永元年九月一四日の条、文治元年八月二一、二三日の条、建久六年
 九月一五、一六日の条。
- ② 黒川真道「大和国金峰神社所蔵の鍍金経筒考」(「考古界」五一、
 一九〇五年)。石田茂作・矢島恭介「金峰山経塚遺物の研究」一九三
 七年。佐藤虎雄「藤原道長の金峰詣」(「大和文化研究」二二、一九
 五四年)。保坂三郎「藤原道長の経塚」(「経塚論考」一九七一年)。三
 宅敏之「藤原道長の埋経」(「角田文博博士古稀記念古代学論叢」一九
 八三年)。斎藤融「藤原道長の金峰山信仰」(「日本歴史」五五三、一
 九九四年)など多数。
- ③ 三宅敏之「平安時代埋経供養の一形態―清原信俊の埋経を中心と
 して」(「日本歴史」一八一、一九六三年)。
- ④ 景山春樹「横川における如法写経と埋経」(「考古学雑誌」五四―三、
 一九六九年)。保坂三郎「比叡山横川経塚」(「経塚論考」一九七一年)。
 滋賀県教育委員会「比叡山横川経塚遺物整理調査報告」一九七九年。
- ⑤ 石田茂作「那智発掘仏教遺物の研究」一九二七年。矢島恭介「熊野
 那智の遺物と金経門縁起」(「古代」三九・四〇合併号、一九六二年)。
 上野元・巽三郎「熊野新宮経塚の研究」一九六三年。杉山洋「熊野三
 山の経塚」(「文化財論叢」一九八三年)。東京国立博物館「那智経塚
 遺宝」一九八五年)。
- ⑥ 島田貞彦「山城国愛宕郡花背出土の経塚遺物に就いて」(「考古学雜
 誌」一七一―一、一九二七年)。同「山城国花背発見の経塚について」
 (「歴史と地理」二二―一、一九二八年)。佐藤虎雄「花背村の経塚」

〔京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告〕一〇、一九一九年。

- ⑦ 田沢金吾「鞍馬寺経塚遺宝」一九三三年。清水卓夫・藪田嘉一郎ほか「京都古銘選釈 四、鞍馬寺銅製経筒」〔史迹と美術〕一三三四、一九四二年。前掲註③文献。保坂三郎「鞍馬寺経塚遺物」一九七一年。

⑧ 高橋健自「山城稻荷山経塚及発掘遺物に就きて」〔考古学雑誌〕二一八、一九二二年。岩井武俊「山城稻荷山経塚遺物の研究」〔考古学雑誌〕二一八、一九二二年。

⑨ 小田富士雄「九州の経塚」〔仏教芸術〕七六、一九七〇年。

⑩ 小田富士雄「古代の求菩提山とその信仰」〔北九州市立歴史博物館紀要〕一、一九七九年。

⑪ 杉山洋「四王寺型経筒」〔MUSEUM〕四一三、一九八五年。

⑫ 杉山洋「浄土への祈り」一九九四年。村木二郎「九州の経塚造営体制」〔古文化談叢〕四〇、一九九八年。

⑬ 千々石実「末法思想高潮の誘因」〔東京学芸大学研究報告〕一一、一九六〇年。同「八幡信仰と経塚の発生」〔日本仏教〕八、一九六〇年。同「初期経塚鎮西密集考」〔日本歴史考古学論叢〕一九六六年。服部清道「埋経の源流」〔日本歴史〕一七三、一九六二年。藪田嘉一郎「経塚の起源」一九七六年。坂詰秀一「埋経の源流」〔歴史考古学の構想と展開〕一九七七年。同「埋経の源流をめぐる問題」〔古代学論叢〕一九八三年。関秀夫「経塚起源論」〔論争・学説日

本の考古学〕六 歴史時代（一九八七年）など。

⑭ 鎌木義昌・龟田修一「播磨江ノ上経塚発掘調査報告書」一九八八年。森内秀造「兵庫県における同形態経筒の一例」〔兵庫県立歴史博物館ニュース〕三三、一九九〇年。同「経筒の形態からみた兵庫県の経塚」〔兵庫の経塚〕一九九二年。中村弘「兵庫県一乗寺経塚とその出土遺物」〔考古学雑誌〕七七四、一九九二年。

⑮ 前掲註⑭森内秀造一九九二年文献。

⑯ 吉岡康暢「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」〔石川県立郷土資料館紀要〕一九八五年。

⑰ 大村敬通・水口富夫「魚住古窯跡群」一九八三年。荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」〔福井考古学会々誌〕三、一九八五年。丹治康明「東播系須恵器について」〔中近世土器の基礎研究〕一九八五年。森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」〔神戸市立博物館研究紀要〕三、一九八六年。

⑱ 赤羽・中野編年として中野晴久「生産地における編年について」〔永原慶二編「常滑焼と中世社会」一九九五年〕に提示。

⑲ 和田千吉「経塚の位置と其内部の状態」〔考古学雑誌〕二一八、一九二二年。稲垣晋也「経塚と遺物」〔経塚遺宝〕一九七七年。阿刀弘史「北部九州における初期経塚の展開」〔滋賀考古〕一三、一九九五年〕が、遺構を研究対象にしている。

⑳ 前掲註⑲村木二郎文献。

第二章 経筒の型式分類

近畿の経筒は九州の経筒に比べ明確な特徴を見いだすにくいため型式分類は行われて来なかった。しかし九州の経筒と

はやはり一線を画する特徴を備えていることは事実である。しかも中国や四国などの在地的な経筒が個々に大きく異なっており、それぞれの間に共通した特徴が見いだせないのに対し、近畿の経筒はそれぞれの特徴から数群に分類することが可能である。ここではまず近畿の経筒の型式分類を行う。

近畿の経筒はその材質、製作技法から、銅製^①(銅鑄製、銅板製)、鉄製、竹製、須恵質、瓦質、土師質に分けられる。中でも銅製、特に銅鑄製経筒が最も多く、型式分類も銅鑄製、銅板製の二者に限って行う。近畿の銅製経筒は九州のものとは違い、筒身に突帯等の装飾を付すことはなく非常にシンプルである。底板に鏡を転用するものもほとんど見られなく、筒身が非常に薄く作られているものが多い。

(一) 銅鑄製経筒の型式分類

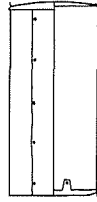
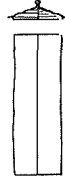
銅鑄製経筒の分類を行うにあたって、筒身に特徴が見いだせない以上、ポイントとなるのは蓋部である。蓋は大きく分けて、笠状の作り出しをもつものともたないものに分かれる。前者を笠蓋、後者を盛蓋と呼ぶ。またそれぞれ天井部に甲盛をもつが、その段数によって、一段笠蓋、二段笠蓋、三段笠蓋、一段盛蓋、二段盛蓋、三段盛蓋とし、筒身の口径を加味して型式を設定して行く。^③

◆一段笠蓋A式(図1-7、図3-1の□)……《山城10^④・上醍醐、紀伊9・那智、播磨8・二塚古墳、播磨14・鳥羽(二点)、摂津7・清水》

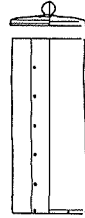
口径を九・〇±〇・二cmとほぼ同じくする小型の一群である。いずれも宝珠鈕を頂くもので、無台の宝珠ではあるが形は崩れてはいない。播磨周辺地域に多いと言えよう。

◆一段笠蓋B式(図1-10、図3-1の□)……《山城1・花背別所1号、同3号、山城2・鞍馬寺、山城13・鳩ヶ峰、紀伊9・那智、播磨12・石原、播磨18・山王、播磨27・瀧ノ内、出土地不明》

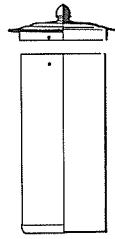
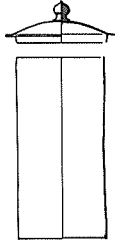
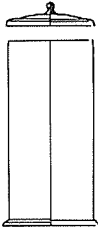
口径が一・〇cm以上の大型のものである。播磨の三点は宝珠が崩れて来たのかソロバン玉状の相輪形に近い鈕を頂く



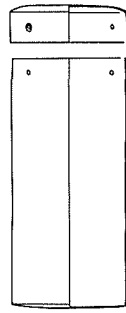
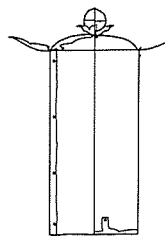
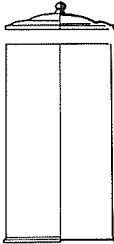
1. 一盛A・栃谷 2. 三盛・山吹山 3. 三笠A・一乗寺2号 4. 銅板B b・藤山4号



5. 一盛B・田多地2号 6. 二盛A・妙楽寺D号 7. 一笠A・鳥羽 8. 銅板Ba (一盛A)・私市円山



9. 二盛B・北野天満宮 10. 一笠B・花背別所1号 11. 二笠・粉河産土神社1号



12. 二盛C・善峰寺 13. 三笠B・江ノ上1号 14. 銅板A・油江 15. 平・金峰山

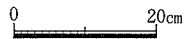


图1 近畿の経筒

のに対し、他の六点はいずれも堂々たる大きな台付宝珠鈕をもつ。後者は京周辺に多く見られ、京の貴族の手になる経塚で用いられたと考えられる。

◆二段笠蓋式(図1-11、図3-1の▲)……《山城2・鞍馬寺^⑤、近江2・横川裏山攪乱、紀伊2・粉河産土神社1号、紀伊4・比井王子神社、紀伊9・那智、紀伊11・庵主池2号》

口径は一〇・四―一一・四cmの中に収まる法量のまとまった一群で、いずれも堂々たる風格が感じられる経筒である。鈕も全て台付宝珠鈕で、比較的大型のものを付する場合が多い。京周辺、紀伊に見られる経筒である。^⑥

◆三段笠蓋A式(図1-3、図3-1の■)……《紀伊10・神倉山2号攪乱、播磨16・江ノ上4号、播磨22・山吹山(三点)、播磨25・家氏、但馬2・一乗寺2号》

口径が六・七―八・六cmの小型のものである。

◆三段笠蓋B式(図1-13、図3-1の■)……《播磨6・高男寺、播磨16・江ノ上1号、播磨21・棠々山》

口径が一・五―一二・七cmの大型のものである。

山吹山の一点を除き、A、B式ともに筒身部と底部を一鑄にするもので近畿の中では技法的に異なった独特の一群である。研究史で述べた通り、近畿の経筒の中で型式として認識されていた唯一のタイプである。^⑦口径のまとまりから本稿ではそれを更に二類に分類した。播磨地域で製作されたと見て間違いあるまい。

◆一段盛蓋A式(図1-11、図3-1の●)……《丹波10・一ノ宮、丹波15・大道寺、丹後7・塚ヶ谷、丹後8・籠神社、丹後11・神明山(三点)、丹後17・西明寺、丹後18・栃谷、丹後19・新側、丹後20・汁谷、丹後21・口三谷(二点)、但馬6・入佐山、但馬10・妙楽寺D号、但馬13・大平寺、但馬15・下浜》

口径が七・三―八・八cmの小型の一群である。いずれも概して小ぶりの鈕を頂くが、必ずしも一定していない。多くはかなり形の崩れた宝珠鈕で、ほとんど棒状の素鈕のものも見られる。全て丹後周辺地域からの出土である。

◆一段盛蓋B式(図1-5、図3-1の○)……《山城8・弁天島攪乱、紀伊11・庵主池2号、播磨22・山吹山、丹後4・日吉神社、丹後5・大虫神社(二点)、丹後8・籠神社(二点)、但馬7・田多地2号、出土地不明(二点)》

口径が九・七〜一〇・七cmにはぼ収まる一群である。^⑧一段盛蓋A式に比べ形の整った宝珠鈕を備えるもので、台付宝珠鈕もしばしば見られる。やや広範囲に分布するものの、そのほとんどはやはり丹後周辺地域に集中している。^⑨

◆二段盛蓋A式(図1-6、図3-1の△)……《山城2・鞍馬寺(二点)、山城11・石作、近江5・九条、紀伊9・那智、紀伊10・神倉山2号攪乱、摂津1・若宮八幡宮、摂津2・大門寺(二点)、丹波1・正釈寺、丹後1・二ノ宮、丹後9・真名井神社、丹後10・上野、但馬10・妙楽寺D号》

口径は九・〇〜一〇・九cmの中にはぼ収まる。^⑩その口径から見ても一段盛蓋B式との関連が考えられ、事実共通点が多い。いずれも形の整った宝珠鈕を頂いており、台付宝珠鈕もある。一段盛蓋B式に比して京周辺のものが増える。

◆二段盛蓋B式(図1-9、図3-1の△)……《山城6・清水寺、山城7・北野天満宮、伊勢6・朝熊山3-A号、播磨8・二塚古墳、但馬7・田多地1号》

口径は一二・〇〜一二・六cmとほぼ同大である。ただしこれは二段盛蓋A式ほどの共通点は見られない。^⑪分布域もあまりを見せない。

◆二段盛蓋C式(図1-12、図3-1の△)……《山城9・稻荷山、山城12・善峰寺、近江2・横川如法塔前2号、同5号、伊賀1・柴原山》

口径が一四・〇〜一五・四cmの大型の一群である。いずれも堂々たる風格が感じられる。善峰寺、横川如法塔前の三点は台付宝珠鈕をもつが、稻荷山、柴原山の二点は鈕を頂かない無鈕のものである。また善峰寺、稻荷山、横川如法塔前5号の三点は陽鏤で天井中央に圏線を飾っている。京を中心とした地域に見られる。

◆三段盛蓋式(図1-2)……《播磨22・山吹山、但馬16・松村3号墳》

点数が少ないため、ひとつの型式として設定することは保留する。口径はそれぞれ八・四cm、九・六cmと大きな違いはないが、底部は前者が筒身と一鑄、後者が入底である。それぞれの出土地点も思い合わせると、前者は三段笠蓋A式に、後者は二段笠蓋A式にその元をたどることができよう。

◆平蓋式(図1-15)……《山城2・鞍馬寺、近江2・横川如法塔前3号、同4号、近江4・比叡南岳3号、大和3・金峰山》

口径は順に一二・七cm、一五・二cm、一五・八cm、一六・七cm、一五・七cmと大型のものである。蓋に段をもたず、鈕も頂かない最もシンプルなタイプのもので、いずれも京に近い大規模な経塚群から出土している。その大きさからも二段笠蓋C式との関係が想定される。

銅鑄製経筒の型式分類は以上である。これらに属さないものも特に京周辺に見られるが、いずれも個体差が激しく型式を設けることはできない。

(二) 銅板製経筒の分類

次に銅板製経筒である。これは九州においてと同様近畿でも銅鑄製経筒に比べ劣勢であるが、その特徴から二種類に分類することができる。ひとつは敢えて銅板で作らなければならなかったタイプのものである。鑄造では表現できない細かな装飾をこらした比較的派手な経筒群を指す。銅板A類と呼ぶことにする。これに對しようひとつは必ずしも銅板で作る必要のないもので、銅板B類と呼ぶことにする。B類には銅鑄製のある型式を模したものと、そうでないものがある。前者を銅板Ba類、後者を銅板Bb類とし、Ba類は銅鑄製の各型式に準ずるものとして扱う。

◆銅板A類(図1-14)……《近江4・比叡南岳2号、紀伊8・熊野本宮、播磨10・宮林、丹波17・今西中、丹後2・油江、丹後

3・河原山、丹後8・籠神社、丹後9・真名井神社、丹後11・神明山、丹後14・山の神1号》

非常に手の込んだ作りで、銅鑄製の経筒とは自ずから受ける印象が違う。

◆銅板Ba類(図1-8)……《播磨2・石峯寺、播磨15・栗田(三点)、播磨24・愛宕山(二点)、丹波12・私市円山、丹後8・

A類とは異なり、銅鑄製の経筒に似た印象を受ける。

石峯寺は銅板を打ち出して大型の素鈕を冠してはいるが、三段の笠蓋を表現しており、三段笠蓋A式の影響が窺える。栗田の三点は蓋の笠部に切り込みを入れ八葉形をなしているが、天井部にわざわざ三段の甲盛を作り出している。口径もふまえ三段笠蓋A式を模したと考えられる。愛宕山の二点は二段の笠蓋に別鑄の宝珠鈕を取り付けている。やや小さいため二段笠蓋式というよりは一段笠蓋A式に近い印象を受ける。出土地も思い合わせるると後者を模したと考えたほうがよい。私市円山は銅板で別作りにした大型の宝珠鈕をもつもので、一段盛蓋B式を模したと考えられる。籠神社は筒身に阿弥陀如来の仏面を貼り付けた珍しいものであるが、素鈕を付したその形は一段盛蓋A式を模している。比叢寺の二点は一段の盛蓋で、小ぶりのシンプルな別鑄の宝珠鈕を取り付けている。一段盛蓋B式を模したと考えられる。

◆銅板B b類(図1-4)……《山城2・鞍馬寺、近江6・鈴鹿山、和泉1・榎尾山A号、大和1・春日山、紀伊6・高尾山1号、同3号、伊勢2・漆、丹波8・藤山4号》

最もシンプルな形の経筒で、取えて平蓋式を模したと考える必要はない。

藤山4号は、筒身と蓋とをつなぎ止めるために筒身上端に別作りの舌を付し、切り込みを入れた蓋端部にそれを差し込み固定するという工夫が見られる。この技法は銅板A類に分類した油江に見られるものと同様で両経筒の関係を窺わしめる。

- ① 正しくは青銅製であるが、銅製と呼び習わされておりそれに従う。
- ② 筒身に突帯を巡らす有筋経筒は九州の経筒に特有のもので、近畿では花背別所5号経筒の一点のみである。
- ③ 筒身の口径は内部に納められる経巻の量を反映するもので、本質的な意味をもつ。一般に経筒は時代と共に細くなって行くが、これは納められる経巻の種類、部数が減少して行くことと関連がある。ちなみに九州では多部の経巻を納める際に一卷に巻直すことが多く見られるため、近畿の経筒に比べ細いものが多い。
- ④ 《番号・経塚名》で表す。番号は図5、表の番号に対応している。
- ⑤ 鞍馬寺経筒は、筒身のみ銅板で作るが、笠蓋、蓮台座を別鑄した大

型の豪華なもので、必ずしも銅板製とは言いがたく、この型式に属させた。

⑥ 特に鞍馬寺と粉河産土神社1号の経筒には京の中流貴族である清原信俊が願主としてこの経塚造営に参画している旨が記されている。他のものもその出土地より考えるに、このタイプの経筒は京の貴族が好んで用いたものと考えられる。

⑦ 播磨地方特有のこれらの経筒の中に一点だけ熊野新宮神倉山の経筒が加わっている。これは播磨の経筒が神倉山へ搬入されたもので、熊野の経塚群が各地からの奉埋納によって形成されていることを追認する。熊野の経塚の奉埋納の様子は前掲第一章註⑤杉山洋文獻に詳しい。⑧ 出土地不明の一点が一・二cmとやや離れた口径をもつ。他の属性においてはこれらのものと共通しているため同じ型式として扱うことにする。

第三章 経筒外容器の分類

経筒外容器は埋経目的に作られた専用品と、日常生活などで用いられる壺や甕を転用した転用品とに分けられる。その種類を挙げてみると、専用品には大きく分けて土師質円筒、瓦質円筒、主に東播系と考えられる須恵質円筒、猿投や常滑、渥美といった東海系の陶質円筒、若干数の石製容器が、転用品には日常的に使われていたと思われる東播系須恵器や、東海系陶器の壺、甕がある。専用品は必ずしも内部に経筒を納めていない場合もあり、直接経巻を納入し、経筒として用いたことが想定されるものもある。⑨ そのため確実に外容器として用いられた場合につき土師質円筒外容器などと呼び、そうでないものに関しては単に土師質円筒などと呼ぶ。

⑨ これら一段盛蓋式は天井部に明確な段をもたないもの全てを含んでおり、必ずしも甲盛をもたないものも含まれる(一段盛蓋B式の籠神社経筒二点)。盛蓋の名を冠する以上これらを含めてしまうのは不適切であるかもしれないが、若干の甲盛をもつものなどと明確な一線を画するものではなく、他の属性等により密接な関係を重視してひとつのグループとして考えることにする。

⑩ やや離れて七・〇cm、八・五cm、八・六cmのものが存在する。後二者はこの一群に含めてもよいが、前者はやや離れ過ぎており時期差も想定されることから、二段盛蓋A式として区別しておくことにする。⑪ 宝珠鈕、台付宝珠鈕以外に、銅板を環状に巻き付けた環状鈕とも呼ぶべき変わったものも見られる(田多地1号経筒)。また底の形式も銅板をはめ込む入底という一般的なものが多いとは言え、外側に被せる被底のものも一点ある(朝熊山3-A号経筒)。

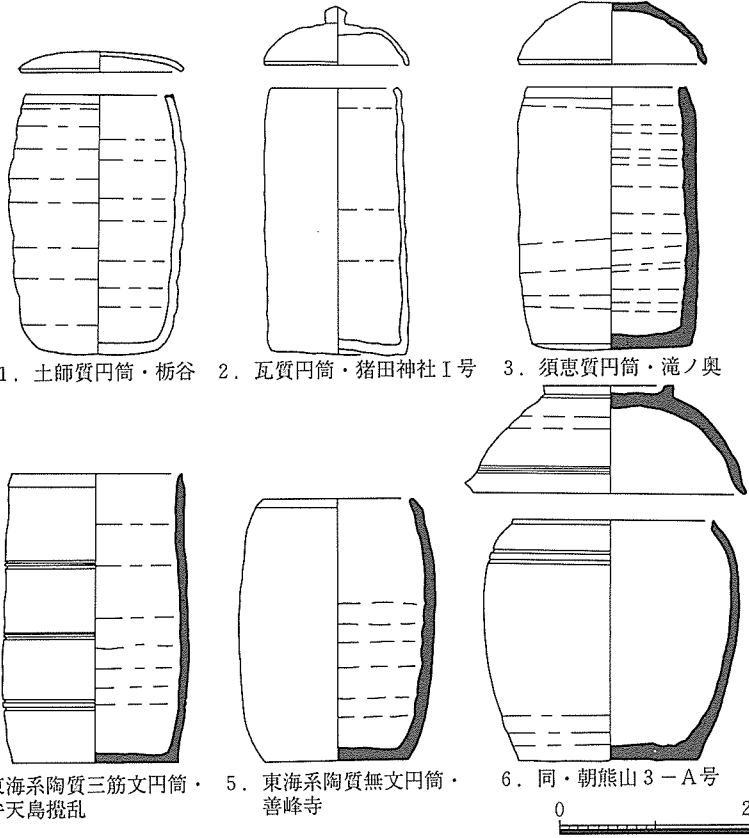


図2 近畿の外容器

- (一) 専用外容器
- ◆ 土師質円筒 (図2-1、図3-2の ●) …… 《山城1・花背別所2号、同5号外容器、山城11・石作(三三)、近江2・横川裏山B-3号、5号、紀伊5・熊岡(二二)、伊勢2・漆(四四)、伊勢6・朝熊山9-E号、同10-A号、同10-H号、同16-A号、播磨3・北別僧、播磨4・萩原、播磨5・伽耶院B号(七七)、播磨7・王子神社外容器、播磨9・王塚古墳、播磨11・福地、播磨15・栗田外容器(三三)、播磨16・江ノ上3号、播磨20・甲山、播磨22・山吹山外容器(四四)、播磨23・八祖山、摂津6・下深田、摂津7・清水外容器、丹波4・西山北(二二)、丹波7・立石、丹波8・藤山2号、丹波9・篠神社(二二)、丹波17・今西中外容器、丹後

1・二ノ宮、丹後3・河原山外容器、丹後5・大虫神社、丹後8・籠神社、丹後12・海士(二点)、丹後13・蔵谷(三点)、丹後14・山の神2号(七点)、丹後15・永留、丹後16・権現山2号、同3号(二点)、同4号、丹後17・西明寺、丹後18・枋谷外容器、丹後19・新側外容器、但馬2・一乗寺1号、同2号外容器、但馬5・畑森、但馬7・田多地3号、但馬8・馬場ヶ先古墳(五点)》

土師質円筒は近畿全域にわたって一般的に用いられているが、特に丹後周辺地域において密であることが判る。概して粘土紐の痕跡を明瞭に残す粗製品であり、蓋を伴うものとならないものがある。蓋には宝珠をかたどった紐が付されている場合もあるが、形はかなり崩れている。

◆瓦質円筒(図2-12)……《山城8、弁天島10号、同12号、山城12・善峰寺、近江2・横川如法塔前5号外容器、同五輪塔下、同裏山B1-6号、同B1-7号、同D1-2号、同攪乱、紀伊6・高尾山攪乱、紀伊10・神倉山1号攪乱(二点)、同2号攪乱、伊賀2・猪田神社I号、同III号、同攪乱(11点)、伊勢2・漆、播磨16・江ノ上2号、丹波1・正釈寺、丹波10・一ノ宮外容器(二点)、丹後1・二ノ宮(二点)》

瓦質円筒も近畿全域にわたって分布している。土師質円筒に比べると作りは丁寧ではあるが、やはり全体的に粗製であることには変わらない。

◆須恵質円筒(図2-13、図3-12の■)……《山城1・花背別所6号、播磨1・北坊、播磨7・王子神社経筒、播磨8・二塚古墳(二点、内一点は外容器)、播磨13・円満寺、播磨17・西田原、播磨19・宮山A号、同B号、摂津4・滝ノ奥、摂津6・下深田、丹波2・平石山、丹波3・上板井、丹波6・小野原住吉、丹波13・稲葉山外容器、丹波14・高田山1号外容器(二点)、同2号》
須恵質円筒は堅く焼き締められたもので、播磨地域を中心に分布している。これらはその分布域からも、ほとんどは東播系の窯で焼成されたことが推測される。

以上の三種は専用品とは言え概して調整も粗く、個体差の大きい粗製品であることが言える。それに対し、東海系陶質

円筒は非常に丁寧に仕上げられている。

◆東海系陶質三筋文円筒(図2-4、図3-2の○)……《山城1・花背別所6号、山城2・鞍馬寺、山城6・清水寺、山城8・弁天島攪乱、山城11・石作(二点、内一点は外容器)、山城14・笠置寺、近江2・横川裏山A号、同C-1号、同C-2号、同D-1号、和泉1・槇尾山2号、紀伊2・粉河産土神社1号外容器》

東海系円筒の中でも、より丁寧な作りをもつ一群に三筋文円筒がある。猿投古窯址群東山六一号窯と一〇五号窯から出土している^④。直線的に立ち上がる胴部に三段の二重沈線を巡らすもので、時代が下がるにつれて上段、下段の沈線が中程に寄って行く傾向がある^⑤。また口縁部もはじめは明瞭なくびれをなし蓋受を形成していたが次第に消滅して行き、胴部もやや膨らむ傾向がある。蓋は大型の宝珠に擬した鈕を頂き、それを巡って沈線が二本引かれるのが一般的である。一二世紀初頭から中頃まで見られ、猿投以外に渥美でも焼かれた。

◆東海系陶質無文円筒(図2-5・6、図3-2の○)……《山城1・花背別所1号外容器、山城2・鞍馬寺、山城3・修学院1号、同2号、山城5・東山松原、山城9・稲荷山(二点、内一点は外容器)、山城11・石作外容器、山城12・善峰寺(三点)、山城14・笠置寺、近江1・打見山、近江2・横川裏山B-1号、同攪乱、近江4・比叡南岳1号、近江5・九条、和泉1・槇尾山A号、大和1・春日山、紀伊3・高野山奥院外容器、紀伊8・熊野本宮外容器、紀伊10・神倉山1号攪乱、同2-g号、同2-h号、同2-i号、同3号、紀伊12・如法堂3号(二点)、同4号、同6号、伊賀2・猪田神社攪乱、伊勢1・青山、伊勢2・漆(七点)、伊勢3・丁塚、伊勢4・豆石山、伊勢5・世義寺、伊勢6・朝熊山1号、同3-A号外容器、同3-B号外容器、同4号、同5号、同7-B号、同8-A号外容器、同8-B号、同9-A号、同9-B号、同9-D号、同10-A号、同10-C号、同10-E号、同10-G号、同10-I号、同14号、同15号経筒、同16-C号、同16-E号、同18-A号》

特に渥美では無文円筒が多く作られており、三筋文円筒も含めて、経塚造営に果たした役割は大きい。中でも渥美半島を支配下においていた伊勢神宮神官により営まれた朝熊山経塚群からは大量の渥美産無文円筒が出土している。粘土紐痕

をとどめるものもあるが、全面に丁寧な調整を施したこれらの円筒は、他の経塚からもしばしば発見されており、紀年の判る朝熊山出土品(一一五六年5号、一一五九年3-A号外容器、一一六九年3-B号外容器、一一七三年1号)を手掛かりにする程度の年代が推定できる。^⑥

これら東海系円筒は渥美半島の対岸にあたる伊勢に重点的に見られるほか、京周辺の経塚にもしばしば見られるが、播磨や丹後周辺地域には一点も見られないのは顕著な差である。

◆石製容器……《山城4・浄土寺、近江2・横川如法塔前6号、同裏山D-3号、和泉1・槇尾山1号》

石製容器は計四点と非常に少なく、九州で滑石製経筒・外容器がしばしば見られたのとは対照的である。^⑦

(二) 転用外容器

転用品の壺・甕は、中世土器研究の著しい進展に伴い編年が打ち立てられ、これらを元に紀年銘のない経塚も大まかな年代が推測できるようになった。以下、東播系須恵器は荻野繁春氏の、^⑧常滑の甕は赤羽一郎・中野晴久両氏の編年研究を^⑨参考にする。

a 須恵器甕(図3-12の▲)

◆東播系甕……《紀伊1・大藪、紀伊6・高尾山2号、播磨6・高男寺、播磨14・鳥羽、播磨15・栗田、播磨16・江ノ上1号、同4号、播磨27・瀧ノ内、摂津8・二本松古墳、丹波1・正釈寺(二点)、丹波6・小野原住吉、丹波9・篠神社(二点)、丹波15・大道寺、但馬2・一乗寺3号、但馬3・新宮山1号、但馬4・清滝神宮(二点)、但馬6・入佐山、但馬10・妙楽寺D号》^⑩

次の時期に位置付けられる。

Ⅲ期(一二世紀中葉)……高尾山2号、高男寺、新宮山1号、入佐山

Ⅳ期(一二世紀後葉)……栗田、江ノ上1号、瀧ノ内、大道寺、一乗寺3号、清滝神宮

V期(一二世紀末～一三世紀中葉)……大藪、江ノ上4号、篠神社、妙楽寺D号(粉河産土神社2号)

◆その他の須恵器甕……《山城8・弁天島3号、播磨1・北坊、播磨25・家氏、摂津3・鉢塚、丹波2・平石山、丹波8・藤山1号、丹後10・上野、丹後14・山の神2号(二点)、但馬13・大平寺》^①

播磨、丹後周辺地域により密な分布を見せることが判る。

b. 東海系壺・甕(図3-2の△)

◆常滑甕……《山城1・花背別所3号、同4号、山城7・北野天満宮、山城8・弁天島攪乱、山城14・笠置寺、近江2・横川裏山B

1-8号、紀伊2・粉河産土神社2号、同3号、紀伊4・比井王子神社、紀伊6・高尾山1号、同3号、紀伊7・飯庵山2号、同3

号、伊賀2・猪田神社攪乱、伊勢6・朝熊山15号、摂津1・若宮八幡宮、摂津2・大門寺、丹後7・塚ヶ谷、但馬12・野上》

このうち年代の窺えるものは以下の通りである。

1b期(二二三〇~五〇):花背別所4号、弁天島攪乱、高尾山1号、同3号、朝熊山15号

2期(二一五〇~七五):花背別所3号、北野天満宮、笠置寺、横川裏山B-8号、比井王子神社、猪田神社攪乱、若宮

八幡宮、大門寺、塚ヶ谷、野上

2~3期(二一五〇~九〇):飯庵山2号

◆その他の東海系壺・甕……《近江2・横川裏山B-2号、紀伊10・神倉山2-b号、同2-c号、紀伊11・庵主池2号、紀伊

12・如法堂5号(二点)、伊賀2・猪田神社II号》

京を中心に広く分布するが、丹後周辺地域に二点、播磨周辺には皆無と須恵器甕とは対照的な分布を示す。^②

① 杉原和雄氏は「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」

『史想』一九、一九八一年、「経塚遺構と古墓」(京都府埋蔵文化財論

集一、一九八七年)、「経塚と墳墓」(考古学雑誌)七四-四、一九八九年)と一連の論考の中で、土師質円筒を骨蔵器の可能性があると

一定の条件を満たさない限り経塚遺物として扱うことに反対している。

② 蓋を伴わない場合も、伏せて経筒に被せて用いた場合はまれで、おそらく蓋は欠失してしまったものと思われる。

③ 王子神社須恵質円筒は更に土師質円筒外容器に納められており、経筒としての使用が判る例である。

④ 檜崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜」(名古屋大学文学部

- 研究論集「史学二五、一九七八年」。
- ⑤ 前掲註④文献。
- ⑥ 最近発掘調査の行われた伊勢・蓮台寺滝ノ口経塚群からも渥美産無文円筒が多数出土しており、中に朝熊山5号円筒と同じ筆跡の保元元年(一一五六)銘のものがある。
- ⑦ 石材の差という理由が最も大きいであろうが、それに代わる豊富な焼き物が用意されていたことも大きな要因であろう。
- ⑧ 近畿の経塚に見られる最も多い転用品の外容器は東播系の須恵器甕と、常滑の甕であり、いずれも中世土器研究の中で最も進展を見せているもののひとつである。東播系須恵器については神出、魚住古窯址出土の豊富な資料を用いて立てられて来た研究をふまえた荻野繁春氏の編年研究の成果を参考にする(前掲第一章註⑦荻野繁春文献)。氏は一世紀後半から一四世紀前半までを片口鉢をもとに六期に分けて編年しているが、当該期のものは、Ⅲ期(一二世紀中葉)、Ⅳ期(一二世紀後葉)、Ⅴ期(一二世紀末―三世紀中葉)に示はられる。
- ⑨ 常滑の甕については長年の研究成果の集大成として一九九五年に開かれた全国シンポジウム「中世常滑焼をおつて」で提示された、赤羽一郎・中野晴久両氏による生産地編年を参考にする(前掲第一章註⑩文献)。甕、広口壺、山茶碗に基づき一二世紀から一六世紀までを一四期に分けている。当該期は甕の生産が始まる1b期(一一三〇―一五〇年)から2期(一一五〇―一二七五)、3期(一二七五―一九〇)までのものである。
- ⑩ 大道寺外容器の甕はⅢ期に当たりますが、蓋に用いられた片口鉢がⅣ期のものであるためⅣ期に位置付ける。このほか粉河産土神社2号経塚からは2期の常滑甕外容器の蓋として用いたⅤ期の東播系片口鉢が出土しており、Ⅴ期に位置付ける。
- ⑪ 大平寺経塚では珠洲焼の甕が外容器に用いられている。珠洲焼の甕は北陸を中心に日本海側の東北地方一帯で経筒外容器として用いられる最も一般的なものであるが、西日本では非常に珍しく、これ一点のみである。吉岡康暢氏の編年により一二世紀末から一三世紀初頭に位置付けられている(前掲第一章註⑫文献)。
- ⑫ 横川裏山B12号からは猿投の四耳壺が出ているが、これは一二世紀初頭の猿投折戸窯で焼かれたものと考えられている(前掲第一章註⑬滋賀県教育委員会文献)。
- ⑬ 神倉山21b号、猪田神社Ⅱ号からは常滑三筋壺が出土している。檜崎彰一氏の編年により、それぞれ一二世紀第1四半期、第2四半期に位置付けられる(前掲註⑭文献)。
- ⑭ 庵主池2号からは渥美の甕が、如法堂5号からは渥美の壺が出土している。後者は檜崎氏により一二世紀第4四半期に位置付けられている(前掲註⑮文献)。
- ⑮ 他に外容器に用いられたものに、丹後2・油江経塚に曲物を転用したものがあつた。これはかなり破損していたものの、経筒の蓋の上や周囲に破片が集中していたことから外容器として使用されたことがまず間違いない例である(梅原末治「神崎村油江ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査報告』一六、一九二五年)。山城8・弁天鳥経塚群からも曲物の破片が見つかつており(小椋山一良「広隆寺旧境内・弁天鳥経塚群」『京都嵯峨野の遺跡』一九九七年)、他の経塚でも同様のものがあつた可能性は予想される。また近江2・横川如法塔前1号経塚には上東門院彰子の金銅製経筒を納めた銅塔がある(前掲第一章註⑯滋賀県教育委員会文献)。現在判っている中では、藤原道長の経塚に次いで古い埋経例で、経塚起源を考えるにあたって重要な鍵を握っていると思われる、外容器の中でも屈指の遺物である。

第四章 経塚による地域区分

近畿の経塚はこれまで漠然とひとまとめにされていた。しかしこれまで述べて来た経筒の型式分類、外容器の種類によって三地域に分けることができる。それらを「京の経塚」、「播州の経塚」、「三丹の経塚」と名付け、それぞれの地域の経塚について見てみたい(図3)。

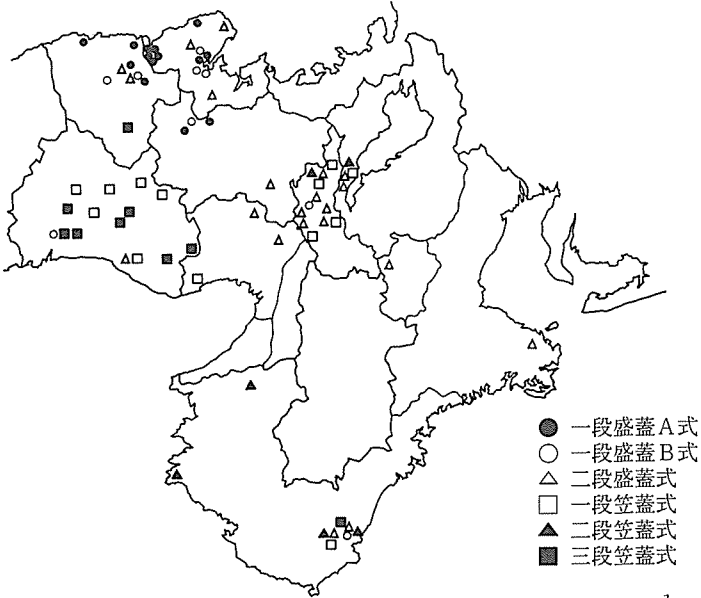
(一) 京(みやこ)の経塚

まず「京の経塚」について述べる。近畿の経塚と言えはすぐに連想される、いわゆる平安京の貴族による華やかな経塚が多数造られた地域である。平安京を中心に、山城、近江、大和、河内、和泉、紀伊、伊賀、伊勢、丹波南東部、摂津東部をその範囲とする。

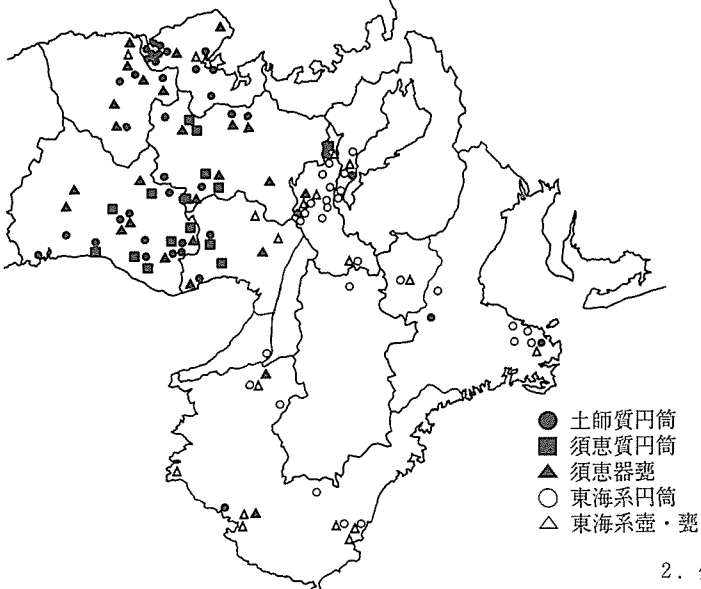
多様で豪華な副納品を有し、全体的に大型で種類も豊富な経筒を使用しているが、二段盛蓋式(図3-1の△)、二段笠蓋式(図3-1の▲)が特にこの地域特有の経筒と言える。外容器も様々な焼き物が用いられているが、東海系(図3-2の○・△)が多く見られる。特に東海系の専用品は後に述べる播州、三丹の経塚にはなく、近畿の中でも顕著な差が現れている。

この地域の経塚は紀年銘をもつものが多く、一〇〇七年金峰山経塚―一二八九年浄土寺経塚まで三百年近い期間にわたるが、特に一二世紀の百年間に盛んに造られたことが判る。外容器に用いられた常滑や東播系甍などの年代もこの事を更に裏付けており、京の経塚は一二世紀代を通じてほぼコンスタントに造営されたと考えて間違いはない。

京の経塚は平安京を中心に熊野に至る南方へとより密な分布を見る。熊野三山の経塚からは様々な地域からもたらされた経筒が出土しているが、これは当時熊野詣でが爆発的な流行を見たことから判るように、様々な地域の人々が経筒を奉埋納しているからであり、基本的に願主や勸進僧の地元で造られる一般的な経塚とは異なる。ただ熊野から出土する経筒



1. 経筒の分布



2. 外容器の分布

図3 経筒・外容器の分布

の大半はやはり京からもたらされたものであり、その意味では主として京の貴族達を願主とした経塚として京の経塚の仲間に入れられるであろう。紀伊に見られる他の経塚も経筒の型式が全く平安京周辺と同じ様相を示している。粉河産土神社1号経塚^②に見られるように、ある程度はやはり京の貴族によつて造られたと考えることができる。伊勢の経塚は伊勢神宮の神官層により造営されたと考えられるが、渥美半島からの経筒、外容器が主流を占めていることから本稿では京の経塚として扱っておく。

(二) 播州の経塚

次に「播州の経塚」を見る。これは播磨を中心に、摂津西部・丹波南部一带を分布圏とする。

京の経筒に比べやや小型のきらいがあるものの、三段笠蓋式(図3-1-1の■)のような独自の経筒など笠蓋式の経筒を主として用いる。外容器には地元東播系の窯で焼かれた甕を転用したもの(図3-1-2の▲)や専用品である須恵質円筒(図3-1-2の■)を、土師質円筒(図3-1-2の●)と共に多く使用しており、特に須恵質円筒はこの地域の特徴である。これら専用品の中には直接経巻を納めて経筒として使用したものもある^④。東海系は専用品、転用品ともに見られない。

一一四四年極楽寺瓦経塚^⑤が最も古い紀年銘をもつもので、京の経塚に比べ随分遅い。紙本経を埋納する一般的な紀年銘経塚は、一一四九年福地経塚、一一五三年高男寺経塚、一一七四年石原経塚、それに一二七一年有馬温泉寺経塚だけである。そのためこれまでこの地域の経塚は一二世紀半ばを中心に展開し、京を中心とした経塚の流れに包括されると考えられて来た。しかし東播系須恵器編年により一二世紀後半以降に栗田、江ノ上1号、瀧ノ内経塚が、一二世紀末～一三世紀中頃以降に江ノ上4号経塚が位置付けられる。

東播系須恵器編年を援用することにより、この地域の最も特徴的な経筒型式である三段笠蓋式が高男寺、楽々山の同形態経筒^⑥に始まり、江ノ上1号から同4号経筒へ、B式→A式へと変化して行く様子がたどれる。これらの影響下に作られたと考えられる栗田経筒も含め、一二世紀後半から盛んになって行っている。もうひとつ特徴的な経筒に一段笠蓋式があ

る。A式を出土した鳥羽経塚の東播系甕外容器は再埋納され確認できないが、伴出した和鏡に厚縁式のものが含まれており、鎌倉時代にかかる経塚であることが判る。このことから石原経筒から鳥羽経筒へ、B式からより規格性の高いA式への変化がたどれ、これらの影響下に作られたと考えられる愛宕山経筒も含め、同じく一二世紀後半から末期になるにつれますます盛んになって行っていると思われる。このように一二世紀後半から一三世紀前半にかけてますますこの地域の経塚が隆盛していることが判る。

(二) 三丹の経塚

最後に「三丹の経塚」を見る。これは宮津湾、久美浜湾を中心とし、丹波北部、丹後、但馬の三丹地域を舞台とする。

全体的に副納品は乏しく和鏡^⑦以外には少ない。経筒もあまり華やかなものはなく小型で、特に一段盛蓋式(図3-1の●・○)が多く、一段盛蓋A式は三丹特有の経筒である。ほかにも播州の経塚が笠蓋式を多用するのに対し、盛蓋式が多いのが特徴である。またある程度技術的に同系列下に置き得る銅板A類の一群が見られるが、これらは先のものとは対照的に派手な装飾をもつ。鉄製経筒がある程度まとまった点数が見られるのもこの地域の特徴として挙げられよう^⑧。外容器には専用品では主として土師質円筒(図3-2の●)が用いられ、須恵質円筒が使用されるのは稀である。東海系のもは見られない。転用品では東播系を中心とした須恵質の甕が多く、東海系のもは少ない。

三丹の経塚で紀年銘をもつものは一一七〇年山の神1号経塚、一一八八年籠神社経塚、一一八九年真名井神社経塚、一二二五年二ノ宮神社経塚だけである。播州の経塚同様ほぼ一二世紀内に収まることから、これまで近畿の経塚として京の経塚と并列に扱われて来た。しかし既に見たように経筒、外容器によって別のグループに分類できるほか、時期的にもやはり京の経塚と異なることが判る。東播系須恵器編年などにより、一二世紀中頃以降に新宮山1号、入佐山経塚、一二世紀第3四半期以降に塚ヶ谷、野上経塚が、一二世紀後半以降に大道寺、清滝神宮経塚、一二世紀末―一三世紀中頃以降に篠神社、妙楽寺D号経塚が位置付けられる。また大平寺経塚は一二世紀末―一三世紀初頭以降になり、西明寺経塚は厚縁

和鏡を出土することから鎌倉時代まで下がると判断される。

さて、山の神1号経塚の銅板A類は籠神社経塚の銅板A類とほぼ同様の火炎宝珠鈕をもつ経筒であり、あるいは同一工人の手によることを予想させる。前者はこの地域で最も古い紀年銘をもつほかに長文の願文を刻んでおり、都の官人が願主となり、都の銅細工が製作した経筒であることが判る。最古の経塚は平安京の貴族によってもたらされたわけである。籠神社経塚からは次に古い銘をもつ一段盛蓋B式が出土し、一段盛蓋A式も見られる。また、籠神社の境外撰社である真名井神社経塚の銅板A類経筒は、河原山、神明山経筒と同形態であるが、神明山経塚からは籠神社と同形態の一段盛蓋A式も出土しており、丹後一の宮である籠神社の経塚を中心に三丹の経塚造管が当初展開されたことが判る。三丹の銅板A類はこれではほぼ出揃うことから、これら華やかで手の込んだ経筒は都の工人によって作られたものであったが、以後三丹で経塚造管が活発になると、それを補完する形で在地で作られた一段盛蓋式が主流となって作られ続けて行つたと考えられる。入佐山、塚ヶ谷経塚の外容器がやや早い時期を見せるが、大道寺、大平寺、西明寺、妙楽寺D号経塚は一二世紀後半から一三世紀に入つて築かれた経塚で、いずれも一段盛蓋A式を埋納していることはこのことを裏付ける。よつて一段盛蓋A式をもつて最も経塚造管の盛んな様子を読み取ることのできる三丹の経塚は、一二世紀終わりから一三世紀にかけていよいよ広まつて行つたことが判る。

また、一乗寺2号経塚に三段笠蓋A式が一点含まれていることに気づく。この経筒は播州の経塚に最も特徴的な経筒で一二世紀末から一三世紀に入るころに見られるものである。一乗寺経塚は南但馬にあり播州の経塚圏と境を接する。一二世紀後半から次第に隆盛に向かった播州の経塚がこの頃には周辺地域に波及して来ており、播州地域から三丹地域へ経筒が搬入されたと考えられる。同様のことは播州地域でも見られる。三段笠蓋A式を三点出土している山吹山経塚に一段盛蓋B式一点が含まれている。この型式は三丹の経塚に特有のもので、少なくとも播州の経塚には他に見られない。一二世紀末から一三世紀にかけて三丹の経塚も隆盛につれその分布圏を広げて行き、三丹地域から播州地域へ経筒が搬入された

と思われる。

以上三地域に分けて近畿の経塚を眺めて来た。これまで漠然と、近畿の経塚は一二世紀代を通じて盛んに造営されており、様々な経筒が様々な外容器に納められたと考えられていた。しかしそれは主として京の経塚を指しているもので、一二世紀半ば頃から播州の経塚が、一二世紀後半から三丹の経塚が独自の経筒型式、外容器をもって造られ出し、一三世紀に入ってもますますその範囲を広げて流行していったことが明らかとなった。ここに、近畿の経塚の三地域区分を提唱する。

- ① 銘文などより東日本から搬入されたことの判るものもある。前掲第一章註⑤杉山洋文獻に詳しい。
- ② 京の中流貴族である清原信俊が願主である。
- ③ これに関しては東海地方の経塚と照らし合わせ、将来別のグループとして京の経塚から分けられる可能性がある。
- ④ 確実な例は王子神社円筒経筒だけであるが他にもあると思われる。
- ⑤ 和田千吉「播磨の瓦経及願文考」〔考古界〕一一一、二、一九〇一年。矢島恭介「播磨極楽寺の瓦経資料」〔古代〕二五・二六合併号、一九五七年。安藤孝一「播磨極楽寺瓦経塚の研究」〔東京国立博物館紀要〕三三、一九九七年など多数。
- ⑥ 「同一型式の経筒の中でも形態や作りが特に著しい類似を示すものを指して」おり「法量やデザインまでが酷似している」、「同范もしくは同型の概念に近いもの」を指す。杉山洋氏が定義した言葉である〔同形態経筒について〕「古代文化」三五三、一九八三年。両経筒に関しては前掲第一章註⑩森内秀造一九九〇年文獻に詳しい。
- ⑦ 鏡背に阿弥陀仏などの線刻がしばしば見られる。
- ⑧ 兵庫県内の経塚に関しては前掲第一章註⑩森内秀造一九九二年文獻で指摘している。
- ⑨ 兵庫県内の経塚に関しては前掲第一章註⑩森内秀造一九九二年文獻で指摘している。
- ⑩ 南无大恩教主釈迦牟尼如来／南无平等大会一乗妙法蓮華経／南无当来導師弥勒慈尊／釈迦末法代於南閻浮提大日本國山陰／道丹後國管野郡佐野郷大治村円頓寺／如法妙法蓮華経一部十卷奉書写畢／嘉応二年庚寅九月廿日丁酉鑄師伴成包／願主散位徒五位下大江朝臣忠氏／女施主橘氏并子息等。
- ⑪ 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館「山陰の仏教考古」一九七六年。
- ⑫ この地域の経塚にしばしば見られる構造に横口式石室がある。土坑を掘りくぼめて中に石室を築く際、土坑側壁を更に横穴状に掘り進み、その中に石室を築いたものである。このような横口式石室をもつものに、丹波12・私市円山、丹波14・高田山2号、丹後16・権現山1号、4号、但馬2・一乗寺1号、2号、但馬7・田多地1号、3号があり、この地域のみ見られる埋納法である。一乗寺2号経塚は播磨地域の経筒を用い、丹後地域の構造をもつ経塚に埋納された、両地域折衷の経塚と言え、この時期のこの場所を象徴している。

第五章 埋納法からのアプローチ

経塚は、本来法華経その他の経巻を弥勒下生の五十六億七千万年後にまで伝えるという着想の下に造られた。そのため経巻を納めた経筒を、更に外容器や石室で保護し、除湿のために木炭を詰める。また、護法の利器として刀や鏡を配置し、厳重に地下に納める。こういった作法は次第に整えられて行つたと見え、一二三六六年に宗快が撰述した『如法経現修作法』が伝わっている。しかし副納品の一々や石室の細かな構造まで見て行くと様々で、一定のパターンを捉えることはできない。そこで、ここでは外容器と石室の有無に限定して経塚の埋納法を窺うことにする。外容器は経筒を保護するものであるが、必ずしも用いられるものではなく、経筒が直接石室あるいは土坑に埋納される場合もある。以下外容器を専用品と転用品に分けて、経筒、外容器、石室の三者の關係を見て行くことにする。

◆専用外容器―有室式……《山城1・花背別所1号(一笠B)^①、同5号、山城9・稻荷山(二盛C)、伊勢6・朝熊山3―B号、同

8―A号、播磨7・王子神社(須恵)、丹波13・稻葉山(鉄)、丹波14・高田山1号(竹)、丹波17・今西中(銅板A)、丹後3・河原山(銅板A)、丹後19・新側(一盛A)、但馬2・一乗寺2号(三笠A)》

◆専用外容器―無室式……《山城4・浄土寺、近江2・横川如法塔前1号(経篋)、紀伊2・粉河産土神社1号(二笠)、紀伊3・

高野山奥院、摂津7・清水(一笠A)、丹後18・栃谷(一盛A)》

◆転用外容器―有室式……《山城1・花背別所3号(一笠B)、紀伊4・比井王子神社(二笠)、紀伊6・高尾山1号(銅板Bb)、

紀伊7・飯庵山2号(銅板)、紀伊11・庵主池2号(二笠、一盛B)、伊勢6・朝熊山15号(陶)、播磨16・江ノ上1号(三笠B)、同4号(三笠A)、播磨25・家氏(三笠A)、丹波15・大道寺(一盛A)、丹後2・油江(銅板A)、但馬6・入佐山(一盛A)、但馬

12・野上(鉄)》

◆転用外容器―無室式……《山城7・北野天満宮(二盛B)、紀伊1・大藪(瓦)、紀伊2・粉河産土神社2号(瓦)、紀伊6・高

尾山3号(銅板B_b)、播磨27・瀧ノ内(一笠B)、摂津8・二本松古墳(銅板)、丹後7・塚ヶ谷(一笠A)》

◆直納―有室式……《山城1・花背別所7号、山城13・鳩ヶ峰(一笠B)、近江4・比叡南岳3号(平)、大和2・河合寺、紀伊

10・神倉山2―d号、紀伊12・如法堂2号、播磨18・山王(一笠B)、播磨19・宮山C号(鉄)、播磨21・楽々山(三笠B)、播磨

24・愛宕山(銅板Ba式・一笠A)、丹波8・藤山4号(銅板B_b)、丹波11・殿山、丹波12・私市円山(銅板Ba・一笠B)、丹後

11・神明山(一笠A、銅板A)、丹後16・権現山1号(鉄)、但馬1・谷ノ上、但馬3・新宮山2号、但馬7・田多地1号(一笠B)、

同2号(一笠B)、但馬10・妙楽寺A号(鉄)、同B号、同C号(鉄)、但馬11・金山(鉄)、但馬16・松村3号墳(三笠)、但馬17・

松村4号墳》

◆直納―無室式……《山城8・弁天鳥2号(経篋)、近江2・横川如法塔前2号(二笠C)、同3号(平)、同4号(平)、近江4・

比叡南岳2号(銅板A)》

九州の経塚には比較的副納品が少ないので、外容器も石室も経筒を保護する機能で共通しており、どちらか一方があればその目的は達せられる。そのためほとんどの場合外容器と石室の両方をもつことはないが、近畿の経塚に関しては必ずしもそのような関係は成り立たない。近畿では和鏡を主として豊富な副納品が見られる。そのため外容器は経筒を保護するものであり、石室は副納品をも保護するものとして両立し得たのである。しかしだからといって六通り全てが満遍なく見られることは注意しなければならない。

京の経塚に特有の経筒型式である二段盛蓋C式をもつ経塚の遺構が三件判っているが、稻荷山経塚は専用外容器―有室式、北野天満宮経塚は転用外容器―無室式、横川如法塔前2号経塚は直納―無室式となんら共通性は見られない。

播州の経塚に特有の三段笠蓋式をもつ経塚を見ると、同形態経筒の関係にある高男寺経塚と楽々山経塚では、前者が遺構は判らないものの東播系甕外容器を用いたのに対し、後者は外容器を使わず直接瓦囲の室に納める。他の三段笠蓋式を用いる経塚も、江ノ上1号、同4号、家氏経塚は転用外容器―有室式、山吹山、栗田経塚では専用外容器を用いている。

一段笠蓋式でも、山王、愛宕山経塚が直納―有室式、鳥羽経塚は転用外容器を用いており、瀧ノ内経塚は転用外容器―無室式、清水経塚は専用外容器―無室式と経筒・外容器・遺構の関係はバラバラである。

三丹の経塚はほとんどが石室を備えているが、外容器をもつものもたないものの数はほぼ同数である。同形態経筒をもつ経塚では河原山経塚と神明山経塚があるが、前者が土師質円筒に納めるのに対し後者は外容器をもたない。三丹の経塚特有の一段盛蓋A式をもつ経塚では新側経塚が専用外容器―有室式、栃谷経塚が専用外容器―無室式、大道寺経塚が転用外容器―有室式、塚ヶ谷経塚が転用外容器―無室式、神明山経塚が直納―有室式と全くバラバラの様相を見せる。

以上、近畿の経塚にはある程度まとまった経筒型式が見られるものの、それを共有する経塚の間に外容器・遺構との一定したセット関係が見いだせないことが判った。

① () 内に経筒の型式・分類を記す。一笠A：一段笠蓋A式、一笠

B：一段笠蓋B式、二笠：二段笠蓋式、三笠A：三段笠蓋A式、三笠

B：三段笠蓋B式、一盛A：一段盛蓋A式、一盛B：一段盛蓋B式、

二盛B：二段盛蓋B式、二盛C：二段盛蓋C式、三盛：三段盛蓋式、

平：平蓋式、鉄：鉄製、竹：竹製、須恵：須恵質円筒、瓦：瓦質円筒、

陶：東海系陶質無文円筒、経筒：銅製経筒。銅板Ba式の後には模倣した経筒の型式を記す。

② 近畿の経塚では和鏡は副納品として納めるが、九州の経塚では経筒の底板の代わりに和鏡を転用しているものがしばしば見られる。経塚における和鏡の役割が近畿と九州とは異なっていたのかもしれない。

結 語

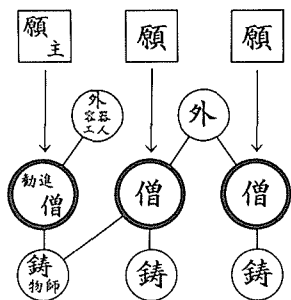
末法思想が根を張る時代、経塚は浄土への祈りを込めた人々の篤い信仰の所産として各地に築かれた。願主は自ら筆を執り、あるいは僧に依頼して法華経を主とした写経の功德を積む。その功德にあやかろうと、経塚造営費の一部を負担するなどし、時には経筒に名を刻んでもらう結縁者もいる。特注品である銅製経筒は、鋳物師の手により作られる。外容器も専用品となるとこれまた特注品で、各地の工人たちが製作することになる。ひとつの経塚が築かれるまでに、様々な人々が介在しているのである。そしてこれらの企画を全て取り仕切るのが勧進僧であり、経塚造営作法を身につけ、供養

儀式一般も執り行つたと思われる。

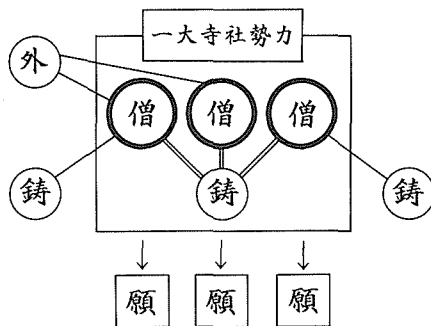
近畿の経塚は、九州の経塚と対比させることによって特徴が一段と明瞭になる。そこで本稿を締めくくる前に、前稿の内容を簡単に紹介し、九州の経塚の特徴を見ておきたい。九州の経塚は一一世紀末から突如流行する。大宰府で生産されたと考えられる画一性の高い四王寺型経筒の登場が鍵を握っている。この経筒は外容器に納め無室の土坑に埋納されていたが、より規格化された積上式経筒の登場によって消滅して行く。大型のこの経筒には外容器は適さなかったのか、外容器を廃して土坑内に石室を設けた経塚が造られるようになる。他型式の経筒も存在するが、これらも四王寺型の時期のもののは外容器に、積上式の時期のものは石室に保護され埋納される。そこで、四王寺型、積上式を生産する鋳物師と密接な関係をもつ勸進集団が存在すると考えられる。この集団には一定の経塚造管作法が整っており、これらの経筒は同じような方法で埋納される。これらの経筒を補完する意味で、この集団は他の経筒を生産する鋳物師からも経筒を取り寄せ、かなり大規模に経塚造管を展開した。鋳物師と恒常的な関係を保ち、経塚造管体制を確立することによって、画一性の高い経塚が多数造管されたのである。

さて、本稿でも前稿同様、近畿の経塚の経筒、外容器、埋納法の三点について分析して来た。最後にこれらをまとめ、九州の経塚との相違を明らかにしたい。

経塚の嚆矢は一〇〇七年藤原道長による金峰山経塚の造管である。その後上東門院彰子の埋経事例で知られるように横川の経塚などが造管されたが、一一世紀後半までの段階では点的な広がりとして散在していたに過ぎず、一二世紀に入つて漸く盛んになって来る。京の経塚は一二世紀代を通じてコンスタントに造管され、一三世紀に入つても衰えはするものの依然として造られ続ける。これを支えたものとして東海から搬入されて来る専用外容器は見逃せない。播州の経塚は一二世紀中頃から次第に造られるようになり後半にピークを迎える。三段笠蓋式に象徴される独自の経筒をもつ地域で、外容器も須恵質円筒など地元の工人の手になるものが使われた。一三世紀に入つても依然衰えることなく、丹後方面へ影響



1. 近畿の経塚造営モデル



2. 九州の経塚造営モデル

図4 経塚造営モデル

を及ぼして行った。三丹の経塚は一二世紀後葉になって漸く見られるようになるが、一段盛蓋A式を主とした独自の経筒を用い、一二世紀末から一三世紀にかけてピークを迎える。外容器は地元で作られる土師質円筒を多く用い、一三世紀には周辺にまで影響を与えるようになる。これまで近畿の経塚と一概に言われて来たものが、実は三群に分けられ、独自の展開をしていたことが判った。

経塚造営作法を反映するのが埋納法、すなわち外容器と石室のあり方である。そして近畿の経塚においては、それが多様な組み合わせを示すことは既に見て来た通りであった。これは各経塚がいずれも経塚造営作法という一定のマニュアルを共有していない、背景を異にする多数の勸進僧によって造られたことを意味する。例えば播州にはこの地域特有の経筒である三段笠蓋式や一段笠蓋式を生産する鑄物師集団が存在し、鑄物師たちは不特定多数の勸進僧たちの依頼に応じてそれらを生産する。しかしそれら勸進僧たちは個々に背景を異にしているため、同型式の経筒が全く異なった埋納法で経塚に納められたのである。鑄物師、専用外容器工人の独立性が見て取れる。九州とは違い、勸進僧は経塚を造営する際に一時的に彼らの協力を仰いだわけで、常に密接に結び付いていたわけではない(図4)。九州ではかなり一元的な経塚造営体制が存在していた。そのため急激な流行が可能であった反面、衰退も急速に訪れた。これに対し、近畿の経塚は勸進僧たちが一通りの集団ではなかったため、その隆盛期は次第に訪れ、去った後も急速な衰退は起こらなかったのである。

九州の経塚は一大寺社勢力と考えられる勸進集団によって組織的展開を見せており、勸進僧がより積極的に率先して結縁者を募った様子が見て取れる。結縁者側から自発的に喚起されたものというよりは、勸進僧によって推し進められた経塚と考えられよう。これに対し、近畿の経塚は次第に成長して来る様子から判るように、その時代の社会の要請に応え、必然的な流行をなした。経塚造営に参画し往生を夢見た願主や結縁者の側からの経塚であり、勸進僧はそれを実現せんと周旋する仲介人と位置付けられる。経塚の二大メッカと称されながらも、両者の性格は全く違うものであることが判る。九州の経塚が短期間で消滅してしまうのに対し、近畿の経塚は長期にわたって造られ続けた原因はこの辺りにあるのではなからうか。

本稿は経塚自体の研究を進めるための基礎研究であるとともに、経塚研究がより一歩踏み出し中世史研究の中でどのような議論を行うことができるか、ひとつの試みとして行った。今後は東日本の経塚へ地域を広げて行くとともに、文献史学の成果を援用し、議論をより深めて行きたい。

【謝辞】 本稿は近畿と九州を中心に中国、四国地方の経塚をも扱った修士論文「西日本の経塚」に加筆、修正したものである。本稿を草するにあたっては、修士論文作成のりから上原真人先生、山中一郎先生、清水芳裕先生より御指導いただいた。また小野山節先生、森下章司、高橋克壽両氏をはじめ京都大学文学部考古学研究室の皆さん、伊藤淳史、久保智康、杉山洋、難波洋三、宮川禎一各氏からは日頃より様々な御教示をいただいております。他にも資料見学に際して、市村高規、井口喜晴、木村美代治、小椋山一良、竹田憲治、田路正幸、福田誠、穂積裕昌、中村弘、水口富夫、山本博利各氏には特に御世話になり、いろいろと御教えいただいた。末筆ながら記して心より御礼申し

上げます。ありがとうございました。

挿図出典 図1-1-2 表文献46。図1-1-4 表文献6。図1-1-5 表文献73。図1-1-6 豊岡市教育委員会『長谷・ホウジ古墳群 妙楽寺・見手山横穴墓群』一九八六年。図1-1-7 表文献41。図1-1-8 表文献53。図1-1-9 表文献7。図1-1-13 表文献42。図1-1-14 表文献6。図2-1-2 表文献29。図2-1-3 表文献45。図2-1-6 表文献42。再トレースに際し、一部修正を加えたものがある。その他は筆者が実測した。図1-1-1、12、図2-1-1、4、5 京都大学蔵。図1-1-3 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所蔵。図1-1-11 奈良国立博物館蔵。

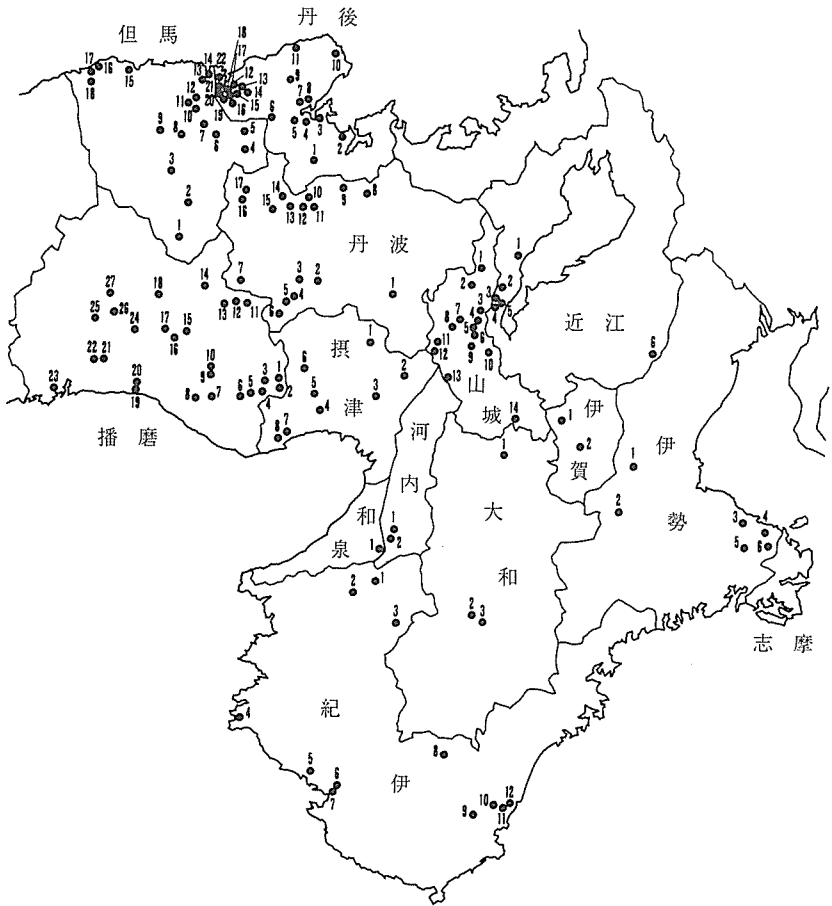


図5 経塚分布図

表 近畿の経塚リスト

番号	経塚	年代	経筒	外容器	外容器蓋	無室	有室	備考	文献		
山城1	花背別所 1	1153	一段笠蓋B式	陶筒	陶筒		○		1		
	〃 2			土師筒	蓋付		○		〃		
	〃 3		常2 常1b	一段笠蓋B式	常滑甕				○	〃	
	〃 4				常滑甕	陶鉢			○	〃	
	〃 5			銅鉢	土師筒	蓋付			○	有節経筒	2
	〃 6				猿投三筋筒	蓋付			○	〃	
	〃 7	1153	銅鉢				○	〃			
	2 鞍馬寺		一段笠蓋B式	◇猿投三筋筒					〃		
			1120	二段笠蓋式	◇陶筒	蓋付			清原信俊	3	
			二段盛蓋A式								
			二段盛蓋A式								
			平蓋								
			銅板B b類								
			銅板								
			1179	銅鉢							
			銅鉢								
3	修学院 1	1289		陶筒	蓋付		○		4		
	〃 2			陶筒			○		〃		
4	浄土寺		銅鉢	石櫃	蓋付	○		5			
5	東山松原			陶筒				軒九瓦	6		
6	清水寺		二段盛蓋B式	◇三筋筒					〃		
			銅鉢						〃		
7	北野天満宮	常2	二段盛蓋B式	常滑甕			○		7		
8	弁天島 2	常2	経筥				○		8		
	〃 3			須恵甕			○		〃		
	〃 10		銅鉢	◇瓦筒						〃	
	〃 12		銅鉢	◇瓦筒					○	〃	
	〃 観乱		一段盛蓋B式	◇三筋筒	◇常滑甕					〃	
9	稲荷山	常1b	二段盛蓋C式	陶筒	蓋付		○		9		
				陶筒	蓋付				〃		
10	上醍醐		一段笠蓋A式						10		
11	石作		二段盛蓋A式	陶筒	蓋付				11		
			銅鉢	三筋筒					〃		
				三筋筒					〃		
				◇土師筒 3					〃		
12	善峰寺		二段盛蓋C式	◇陶筒				再埋納	12		
			銅鉢	◇陶筒 2	蓋付 1						
				◇瓦筒							
13	鳩ヶ峰	1116	一段笠蓋B式				○		6		
14	笠置寺	常2	銅板	常滑甕					13		
			銅板	◇三筋筒	蓋付						
			銅鉢	◇陶筒	蓋付						
			銅製	◇陶筒	蓋付						
近江1	打見山	1031	銅製	◇陶筒	蓋付			上東門院彰子	14		
	2 横川如法塔前 1		経筥	銅塔	蓋付		○		15		
	〃 2		二段盛蓋C式				○		〃		
	〃 3		平蓋				○		〃		
	〃 4		平蓋				○		〃		
〃 5	二段盛蓋C式	瓦筒	蓋付				〃				

番号	経塚	年代	経筒	外容器	外容器蓋	無室	有室	備考	文献
	◇ 6			石製筒	蓋付	○			◇
	横川五輪塔下			瓦筒 1 + α	蓋付		○		◇
	横川裏山A			猿投三筋筒	蓋付	○			◇
	◇ B 1	12初		陶筒	蓋付	○			15
	◇ B 2			猿投四耳壺		○			◇
	◇ B 3			土師筒	蓋付	○			◇
	◇ B 4			土師筒	蓋付	○			◇
	◇ B 5			土師筒		○			◇
	◇ B 6			瓦筒		○			◇
	◇ B 7			瓦筒		○			◇
	◇ B 8	常 2		常滑甕		○			◇
	◇ C 1			三筋筒		○			◇
	◇ C 2			三筋筒	蓋付	○			◇
	◇ D 1			三筋筒	蓋付	○			◇
	◇ D 2			瓦筒		○			◇
	◇ D 3			石製筒		○			◇
	◇ 攪乱		二段笠蓋式	◇陶筒					◇
				◇瓦筒					
				◇白釉壺					
3	比叡西塔		銅製	◇陶甕					16
4	比叡南岳 1			陶筒	蓋付		○		17
	◇ 2		銅板 A 類			○			◇
	◇ 3		平蓋				○		◇
5	九条		二段盛蓋 A 式	◇陶筒					◇
6	鈴鹿山		銅板 B b 類	壺					◇
河内 1	金剛寺	1159	銅製						18
2	金剛山	1175	銅鑄製						◇
和泉 1	横尾山 A	1139	銅板 B b 類	陶筒					19
	◇ 1			石製筒	石		○		◇
	◇ 2			三筋筒	蓋付		○		◇
大和 1	春日山		銅板 B b 類	◇陶筒	蓋付				20
				◇陶甕					
2	河合寺		銅鑄				○	鏡底経筒	21
3	金峰山	1007	平蓋					藤原道長	22
			経筥 5						
		1088						藤原師通	
紀伊 1	大藪	東播 V	瓦製筒	東播甕	倒立	○			23
2	粉河産土神社 1	1125	二段笠蓋式	三筋筒		○		清原信俊	◇
	◇ 2	東播 V	瓦製筒	常滑甕	東播鉢	○			◇
	◇ 3		瓦製三耳壺	◇常滑甕	東播鉢	○			◇
3	高野山奥院	1114	銅鑄	陶筒	蓋付	○			22
4	比井王子神社	1158	二段笠蓋式	常滑甕	陶鉢		○		24
5	熊岡			土師筒 2			○		25
6	高尾山 1	常 1b	銅板 B b 類	常滑甕	倒立		○		23
	◇ 2	東播 III		東播甕	倒立	○			22
	◇ 3	常 1b	銅板 B b 類	常滑甕	倒立	○			23
	◇ 攪乱			瓦筒					◇
7	仮庵山 2	常 2~3	銅板	常滑甕			○		◇
	◇ 3			常滑甕			○		◇
8	熊野本宮	1121	銅板 A 類	陶筒	蓋付				26
9	那智		一段笠蓋 A 式						27
			一段笠蓋 B 式						

近 畿 の 経 塚 (村木)

番号	経 塚	年代	経 筒	外容器	外容器蓋	無室	有室	備 考	文献											
10	神倉山 1 攪乱	1156	二段笠蓋式	陶筒	蓋付			←東日本	27											
			二段盛蓋A'式							互筒 3	蓋付 1	←東日本	28							
			銅板							常滑三筋壺										
		銅鋳	渥美壺																	
		11	〃 2 b	12 1/4	銅鋳	陶壺	蓋付		〇	←東日本	〃									
												〃 2 c	〇	〃						
												〃 2 d			〇	〃				
												〃 2 f					〇	〃		
												〃 2 g							〇	〃
												〃 2 h								
〃 2 i	〇											〃								
〃 2 攪乱		〇	〃																	
12				1281	三段笠蓋A式	瓦筒	蓋付				〃									
					二段盛蓋A式								陶筒	蓋付	〇	〃				
					銅板								渥美甕	陶鉢						
銅板 2				〃	〃															
11				〃 3	12 4/4	銅鋳 3	〃	〃	〇		〃		〃							
	二段笠蓋式					瓦筒	蓋付	〇				〃								
12	〃 4	12 4/4	一段盛蓋B式	陶筒	蓋付	〇			〃	〃										
			銅製 2	渥美蓮弁壺 2	〃			〇			〃									
12	〃 5	12 4/4	銅鋳	〃	〃	〇			〃	〃										
			銅製 3	◇陶筒	〃			〇			〃									
伊賀 1	柴原山	1160	二段盛蓋C式	瓦筒	蓋付	〇			〃	22										
			猪田神社 I	瓦筒	蓋付			〇			〃									
伊賀 2	〃 II	12 2/4	常滑三筋壺	常滑三筋壺	蓋付	〇			〃	〃										
				〃 III	瓦筒			蓋付			〇	〃								
伊勢 1	青山	常 2	瓦筒 11	瓦筒 11	蓋付	〇		〃	30											
				漆	常滑甕					蓋付	〇	〃								
伊勢 2	〃	常 2	銅板 B b 類	陶筒	蓋付	〇		〃	31											
			丁塚	◇土師筒 4	蓋付					〇	〃									
伊勢 3	豆石山	1178	銅製 2	◇陶筒 7	蓋付	〇		〃	22											
				世義寺	◇瓦筒					蓋付	〇	〃								
伊勢 4	朝熊山 1	1173	銅製 2	瓦筒	蓋付	〇		〃	34											
				〃 2	瓦筒					蓋付	〇	〃								
伊勢 5	〃 3 A	1159	二段盛蓋 B 式	陶筒	陶鉢	〇		〃	〃											
			〃 3 B	銅製	陶筒					蓋付	〇	瓦罎								
伊勢 6	〃 4	1169	銅製	陶筒	蓋付	〇		〃	〃											
				〃 5	陶筒					蓋付	〇	〃								
伊勢 7	〃 7 B	1156	銅製	陶筒	蓋付	〇		〃	〃											
				〃 8 A	陶筒					蓋付	〇	〃								

番号	経塚	年代	経筒	外容器	外容器蓋	無蓋	有蓋	備考	文献	
播磨1	◇ 8 B	1150		陶筒	蓋付		○		◇	
	◇ 9 A			陶筒					◇	
	◇ 9 B			陶筒					◇	
	◇ 9 D			陶筒					◇	
	◇ 9 E			土師筒					◇	
	◇ 10 A			土師筒					◇	
	◇ 10 C	1186		陶筒			○		◇	
	◇ 10 E			陶筒					◇	
	◇ 10 G			陶筒					◇	
	◇ 10 H			土師筒					◇	
	◇ 10 I			陶筒					◇	
	◇ 14			陶筒					◇	
	◇ 15	常1b	陶筒	常滑甕	陶鉢		○		◇	
	◇ 16 A			土師筒					◇	
	◇ 16 C			銅製					陶筒	◇
	◇ 16 E								陶筒	◇
	◇ 18 A			陶筒					◇	
	北坊									須惠筒
	2	石峯寺		銅板Ba類・三笠A						36
	3	北別僧			土師筒					35
	4	萩原			土師筒					37
5	伽耶院A		金銅	甕					◇	
◇ B		土師筒 7		須惠筒 7	蓋付 7			◇		
6	高男寺	1153	三段笠蓋 B 式	東播甕	蓋付		○		38	
7	王子神社		須惠筒	土師筒					蓋付	35
8	二塚古墳		一段笠蓋 A 式	須惠筒					蓋付	39
			二段盛蓋 B 式	◇須惠筒						
9	王塚古墳			土師筒			○		40	
10	宮林		銅板A類						17	
11	福地	1149		土師筒					41	
12	石原	1174	一段笠蓋 B 式					鏡底経筒	◇	
13	円満寺			須惠筒					◇	
14	鳥羽		一段笠蓋 A 式	東播甕				厚縁和鏡	◇	
			一段笠蓋 A 式	◇					◇	
15	栗田		銅板Ba類・三笠A	土師筒	陶皿 陶皿				17	
			銅板Ba類・三笠A	土師筒						
			銅板Ba類・三笠A	土師筒						
16	江ノ上 1		東播Ⅳ	◇東播甕	東播鉢 蓋付		○		42	
◇ 2	東播Ⅳ	三段笠蓋 B 式	東播甕	○						
◇ 3			瓦筒	○						
◇ 4	東播Ⅴ	三段笠蓋 A 式	土師筒	○						
17	西田原			東播甕	東播鉢				17	
18	山王		一段笠蓋 B 式	須惠筒			○		35	
19	宮山 A			須惠筒	蓋付		○	瓦で内壁	◇	
◇ B				須惠筒			○		◇	
◇ C			鉄製				○		◇	
20	甲山			土師筒			○		◇	
21	楽々山		三段笠蓋 B 式				○	瓦皿	43	

近畿の経塚(村木)

番号	経塚	年代	経筒	外容器	外容器蓋	無室	有室	備考	文献
挿曆22	山吹山		三段笠蓋A式 三段笠蓋A式 三段笠蓋A式 一段盛蓋B式 三段盛蓋式	◇土師筒4					43
23	八祖山			土師筒					35
24	愛宕山		銅板Ba類・一笠A 銅板Ba類・一笠A				○		〃
25	家氏		三段笠蓋A式	須惠甕			○		43
26	今念寺		銅製						35
27	瀧ノ内	東播IV	一段笠蓋B式	東播甕		○			〃
撰津1	若宮八幡宮	1181	二段盛蓋A式	常滑甕	倒立				22
2	大門寺	常2	二段盛蓋A式 二段盛蓋A式	◇常滑甕					17
3	鉢塚		鉄製	◇須惠甕 須惠筒	蓋付		○		44
4	滝ノ奥						○		45
5	有馬温泉寺	1271	経宮 経宮						35
6	下深田			土師筒 須惠筒			○		〃
7	清水		一段笠蓋A式	土師筒		○			46
8	二本松古墳		銅板	東播甕		○			47
丹波1	正積寺		二段盛蓋A式	◇瓦筒 ◇東播甕2 ◇陶甕	蓋付				48
2	平石山			須惠筒 須惠甕			○		49
3	上板井			須惠筒	蓋付		○		50
4	西山北			土師筒2	蓋付2		○		49
5	諏訪腰		鉄製	◇甕					35
6	小野原住吉			須惠筒 東播甕	東播鉢				〃
7	立石			土師筒					〃
8	藤山1			須惠甕 土師筒	倒立		○		51
	〃2						○		〃
	〃4						○		〃
9	篠神社	東播V	銅板Bb類	土師筒2 東播甕2					52
10	一ノ宮		一段盛蓋A式 銅鈔	瓦筒 瓦筒					〃
11	殿山		金銅製				○		〃
12	私市門山		銅板Ba類・一盛B				○	横口式石室	53
13	稲葉山		鉄製	須惠筒			○		48
14	高田山1		竹製3 竹製3	須惠筒 須惠筒	蓋付 蓋付		○		54
	〃2			須惠筒	蓋付		○	横口式石室	〃
15	大道寺	東播IV	一段盛蓋A式	東播甕	東播鉢		○		55
16	月輪		銅鈔						48
17	今西中		銅板A類	土師筒	蓋付		○		56
丹後1	二ノ宮	1225	二段盛蓋A式 銅鈔2	◇土師筒 ◇瓦筒2	蓋付 蓋付1			再埋納	57
2	油江		銅板A類	曲物	蓋付		○		58

番号	経塚	年代	経筒	外容器	外容器蓋	無室	有室	備考	文献	
丹後3	河原山	常2	銅板A類	土師筒	蓋付		○		59	
4	日吉神社		一段盛蓋B式							48
5	大虫神社		一段盛蓋B式	◇土師筒						60
6	雲岩		銅製5							48
7	塚ヶ谷		一段盛蓋A式	常滑甕	倒立		○			61
8	龍神社		一段盛蓋A式	◇土師筒						48
			1188	銅板Ba類・一盛A						
				一段盛蓋B式						
				一段盛蓋B式						
8	龍神社			銅板A類					火炎宝珠鈕	48
9	真名井神社		1189	二段盛蓋A式						62
10	上野		銅板A類	◇須恵甕					6	
11	神明山		二段盛蓋A式				○		63	
			一段盛蓋A式							
			一段盛蓋A式							
			銅板A類							
			銅板							
			銅鈔							
12	海士	1170		土師筒2	蓋付2		○		64	
13	蔵谷			土師筒3					48	
14	山の神1		銅板A類						火炎宝珠鈕	65
	◇2			土師筒7	蓋付7					48
			須恵甕2							
15	永留		土師筒	蓋付			○		66	
16	菰現山1		鉄製				○	横口式石室	67	
	◇2			土師筒	蓋付		○	横口式石室	◇	
	◇3			土師筒2	蓋付2		○	横口式石室	◇	
	◇4			土師筒	蓋付		○	横口式石室	◇	
17	西明寺		一段盛蓋A式	◇土師筒				厚縁和鏡	48	
18	栃谷		一段盛蓋A式	土師筒	蓋付	○			68	
19	新側		一段盛蓋A式	土師筒	蓋付		○		◇	
			銅鈔7	◇						
20	汁谷		一段盛蓋A式	甕					◇	
			銅鈔2	◇						
21	口三谷		一段盛蓋A式						◇	
			一段盛蓋A式							
22	如意寺		銅鈔						69	
但馬1	谷ノ上		銅鈔				○		35	
2	一乗寺1	東播IV		土師筒	蓋付		○	横口式石室	70	
	◇2			土師筒	倒立		○	横口式石室	◇	
	◇3			東播甕	石		○		◇	
3	新宮山1	東播III		東播甕			○		71	
	◇2		銅鈔				○		◇	
4	清滝神宮	東播IV	銅製	◇東播甕2	東播鉢1				35	
				◇陶甕						
5	畑森			土師筒					◇	
6	入佐山	東播III	一段盛蓋A式	東播甕	倒立		○		72	
			鉄製2	(甕の外)						
7	田多地1		二段盛蓋B式				○	横口式石室	73	
	◇2		一段盛蓋B式				○	横口式石室	◇	

近畿の経塚(村木)

番号	経塚	年代	経筒	外容器	外容器蓋	無蓋	有蓋	備考	文献	
但馬8	馬場ヶ先古墳 比叢寺	東播V 常2 →	◇ 3	土師筒	蓋付		○	横口式石室	◇	
			銅板Ba類・一盛B	土師筒5					35	
	銅板Ba類・一盛B								74	
	鉄製2									
	10 妙楽寺A			鉄製2				○		75
	◇ B			銅鑄2				○		◇
	◇ C			鉄製				○		◇
	◇ D			一段盛蓋A式	◇東播甕	東播鉢				◇
				二段盛蓋A式						
				鉄製						
	11 金山			鉄製2				○		76
	12 野上			鉄製	常滑甕			○		72
	13 大平寺			一段盛蓋A式	珠洲甕	倒立			12c.末-13c.初	75
				竹製2	◇					
	14 宝塚			銅製2						35
	15 下浜			一段盛蓋A式						◇
				銅鑄3						
				銅板						
16 松村3号墳		三段盛蓋式				○		◇		
17 松村4号墳		銅鑄				○		◇		
18 三谷 出土地不明		銅製						◇		
		一段笠蓋B式						77		
		一段盛蓋B式						◇		
		一段盛蓋B式						◇		

地図No欄 図3に対応ノ年代欄 常：常滑焼繩年，東播：東播系須恵器繩年ノ経筒・外容器・外容器蓋欄 銅鑄：銅鑄製であるが行方不明or破損or型式分類できないもの，銅板：銅板製であるが行方不明or破損のため分類不可，銅板Ba式：後に模倣した型式を記す，土師筒：土師質円筒，瓦筒：瓦質円筒，須恵筒：須恵質円筒，三筋筒：東海系陶質三筋文円筒，陶筒：東海系陶質無文円筒，東播鉢：東播系片口鉢，陶鉢：東海系片口鉢，陶皿：東海系皿，◇：経筒とのセット関係不明，◇：同一個体，蓋付：外容器専用蓋，倒立：蓋は用いず外容器を倒置

表対応文献

- 1 魚澄惣五郎・梅原末治 1923「花背村ノ経塚及ビ関係遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』4
- 2 佐藤虎雄 1929「花背村の経塚」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』10
- 3 保坂三郎 1971『鞍馬寺経塚遺物』
- 4 梅原末治 1925「修学院村ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』6
- 5 川勝政太郎 1958「浄土寺南田町の経塚遺物」『史迹と美術』280
- 6 蔵田蔵 1965「経塚論9」『MUSEUM』177
- 7 梶川敏夫 1976「北野天満宮境内発見の経塚出土品」『京都考古』24
- 8 小楢山一良 1997「広隆寺旧境内・弁天島経塚群」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告14
- 9 高橋健自 1912「山城稻荷山経塚及発掘遺物に就きて」『考古学雑誌』2-8
- 10 景山春樹 1954「山城考古展の新資料」『史迹と美術』242
- 11 岩井武俊 1910「山城国乙訓郡大原村発掘の経筒」『考古学雑誌』1-2
- 12 梅原末治 1926「善峰寺ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』7

- 13 豊島修 1978「笠置山の修験道」『近畿霊山と修験道』
- 14 景山春樹 1959「比良山中腹から経塚遺物発見」『古代文化』3-9
- 15 滋賀県教育委員会 1979『比叡山横川経塚遺物整理調査報告』
- 16 服部清道 1961「西塔の経塚」『史迹と美術』312
- 17 蔵田蔵 1965「経塚論8」『MUSEUM』176
- 18 関秀夫 1985『経塚遺文』
- 19 久保惣記念美術館 1983『和泉槇尾山発掘調査報告』
- 20 末永雅雄 1949「春日大社本宮跡出土埋経関係遺物」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』3
- 21 上田三平 1928「大和吉野郡天川村河合の経塚」『考古学雑誌』18-6
- 22 奈良国立博物館 1977『経塚遺宝』
- 23 1983『和歌山県史』
- 24 巽三郎・山本賢・高野光勇 1962「紀伊国比井経塚遺跡発掘調査概報」『熊野路考古』1
- 25 安部弁雄 1956「紀伊国熊岡経塚について」『古代学研究』15-16
- 26 杉山洋 1983「熊野三山の経塚」『文化財論叢』
- 27 東京国立博物館 1985『那智経塚遺宝』
- 28 上野元・巽三郎 1963『熊野新宮経塚の研究』
- 29 上野市教育委員会 1975『猪田経塚』
- 30 大西源一 1954「三重県一志郡倭村経塚」『日本考古学年報』2
- 31 小玉道明 1968「三重県一志郡美杉村漆経塚群とその埋納品」『三重の文化』38
- 32 伊勢市立郷土資料館 1991『伊勢の経塚』
- 33 皇学館大学考古学研究会 1986「豆石山経塚」『二見町の遺跡と遺物』
- 34 稲垣晋也 1988「三重県伊勢市朝熊山経塚発掘ノート」『MUSEUM』451
- 35 兵庫県立歴史博物館 1992『兵庫の経塚』
- 36 森田稔 1991「石峯寺経塚 遺物の再検討」『神戸市立博物館研究紀要』8
- 37 1970『三木市史』(p.610)
- 38 武藤誠 1964「三木市志染町出土の経筒と埋納経典」『人文論究』14-4
- 39 太田陸郎 1936「播磨神野村二塚古墳」『考古学雑誌』26-4
- 40 藤沢長治 1957「兵庫県加東郡王塚古墳」『日本考古学年報』5
- 41 水口富夫 1987「解説編 2 考古」『西脇・多可』兵庫県立歴史博物館総合調査報告書
- 42 瀬戸内考古学研究所 1988『播磨江ノ上経塚発掘調査報告書』
- 43 1984『龍野市史』4 (p.348)
- 44 吉岡康暢 1985「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『石川県立郷土資料館紀要』14
- 45 森田稔 1982「滝ノ奥経塚調査概要」『古代文化』34
- 46 福原潜次郎 1905「神戸市石井村発見の経筒及び古鏡に就きて」『考古界』5-2
- 47 辰馬悦蔵・吉井太郎・渡部夕仲 1928「神戸市会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』5

近畿の経塚(村木)

- 48 京都府立丹後郷土資料館 1977『経塚 丹後とその周辺』
- 49 多紀郡教育事務組合教育委員会 1972『西北古墳調査報告書』
- 50 兵庫県教育委員会 1986「上板井経塚の調査」『上板井古墳群』
- 51 時野谷勝 1938「綾部町藤山経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』18
- 52 1976『綾部市史』上 (p.589)
- 53 鍋田勇 1988「私市円山経塚の調査」『京都府埋蔵文化財情報』28
- 54 小池寛 1992「高田山古墳群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』49
- 55 竹原一彦 1981「豊富谷丘陵遺跡(大道寺跡)発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財情報』2
- 56 梅原末治 1920「下夜久野村ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』2
- 57 増田信岳・百田昌夫・杉原和雄 1980「二ノ宮経塚調査概要」『水無月山遺跡発掘調査報告書』
- 58 梅原末治 1925「神崎村油江ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』6
- 59 時野谷勝 1938「宮津町河原山経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』18
- 60 佐藤虎雄 1930「大虫神社境内の経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』11
- 61 梅原末治 1923「男山塚ヶ谷ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』5
- 62 鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1976『山陰の仏教考古』
- 63 梅原末治 1919「神明山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』1
- 64 西田直二郎・梅原末治 1920「海士ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』2
- 65 西田直二郎・梅原末治 1920「円頓寺」『京都府史蹟勝地調査会報告』2
- 66 時野谷勝 1938「下佐濃村永留の経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』8
- 67 久美浜町教育委員会 1984『権現山古墳発掘調査概報』
- 68 西田直二郎・梅原末治 1920「久美谷村ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』2
- 69 佐藤虎雄 1930「如意寺」『京都史蹟』1-7
- 70 中村弘 1992「兵庫県一乗寺経塚とその出土遺物」『考古学雑誌』77-4
- 71 西口和彦・水口富夫 1986「新宮山経塚・中世墓群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』
- 72 和田千吉 1912「経塚の位置と其内部の状態」『考古学雑誌』2-8
- 73 出石町教育委員会 1985『田多地古墳群・田多地経塚群』
- 74 1980『日高町史』資料編 (p.256)
- 75 1993『豊岡市史』史料編 下 (p.284,290)
- 76 1981『豊岡市史』上 (p.151)
- 77 奈良国立博物館 1991『奈良国立博物館蔵品図版目録』考古篇 経塚遺物

The sutra mounds in the Kinki region

by

MURAKI Jiro

From the 11th to 13th century, people who hoped to be reborn in paradise built sutra mounds throughout Japan, especially in the Kinki region and Kyushu. These sutra mounds are valuable archaeological sources for research on religious influence in this period. First, the author classifies types of bronze sutra cases in the Kinki region on the basis of the forms of their lids and the sizes of their calibers. Secondly, the author classifies their ceramic outer cases. By both methods sutra mounds in the Kinki region can be divided into three areas, namely the Miyako-area, the Banshu-area and the Santan-area. Sutra mounds in the Miyako-area are characterized by a type of sutra case with a two-tiered and non-brimmed lid or with a two-tiered and brimmed lid. The ceramic outer case was brought from the Tokai area. In the Banshu-area, sutra cases had a one- or three-tiered and brimmed lid. In the Santan-area, we find sutra cases with a one-tiered and non-brimmed lid.

Finally, the author examines the burying method, which reflects the method of the priest who took the initiative to build the sutra mounds. In Kyushu the method is related to the type of sutra case. This seems to indicate that relations between the leading priests and the casters who made bronze sutra cases were very close. In the Kinki region, however, there is no relation between burying method and sutra case. The reason why the sutra mounds in the Kinki region and Kyushu developed in a different way, is that the institutionalized creation of sutra mounds in each region was different.